
運命邂逅

撲殺天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命邂逅

【Zコード】

N1407N

【作者名】

撲殺天使

【あらすじ】

後悔したまま死ぬ事になつた少年がFATEの世界に引き込まれる。

世界が違えど生きている弟が、少年を強迫観念にも似た感情へと突き動かす。

異界共鳴（前書き）

修正だけでは足りず、始めから書き直す事になりました。それにしても何度もタイトルを変えてしまい、重ねがさね申し訳ありませんでした。

多分もう変わる事はないと思います。（2011・4・24投稿）

アンリの口調がおかしくかんじるかもしれません。

異界共鳴

毎日の淡々とした日々。変わらない日常。享受する平和。平凡な生活。

そんな日常生活は簡単に崩壊した。

ある日突然強盗犯に家族を殺され、生き残った学生の身分の俺は親戚に引き取られたのだ。あまりにも現実味のない出来事のせいか最近の記憶が曇り気だが。

日常生活に戻つてからも信じられず、怠惰な日々を無駄に消費した。尤も、そんな風にだらけた日々を過ぐしてからか、ある日事故であつさり死んだ。

「いやいやいや、なんでだよ」

死んだら普通話すら出来ない。

しかし今俺は声が出るし思考出来る。

「え、何それ恐い。つうかおかしい。おかしいよな。俺、死んだよね。滅茶苦茶痛かったもん。それともついに頭の方がおかしくなつたとか?なんか自分で言つて悲しいんだけど」

しかも周囲が不気味だ。静かすぎる。何より何処までもつづく闇が恐ろしい。

もし精神病棟の病室だつたら白い筈だ。

「それともアレか?夢か?夢なのか?」

訳が分からぬ。

暗闇の中を色ついた人間がポツンと一人。

「……」

ショックだ。こんな訳の分からない夢か若しくは精神疾患が見せる幻なのか知らないが、自分は相当重傷だつたらしい。主に頭の方だが。

漸く事態の異常性を実感し始めた。

「田を覚ますんだ俺。起きるんだ俺。明日はジャンプの発売日だ。このままじゃ買ひにいけねえよ。それだけが唯一残された生きがいだつた筈だ。いや待て。それでいいのか俺の人生」

「…おまえ、意外と冷静だな」

今までの人生を思い返し唸る俺へ返事を期待した訳じゃない。だが自分以外の人間が現れた事に気がついたら無視は出来ない。

「あんた、誰だよ」

突如出現した存在への問いは当然の事。

これ以上の非現実じみた現象がおきない事をねがうばかりだ。生憎と夢だからなのか幻だからなのか、精神的な疲れはかんじないのが救いだ。

認識したその少年をまじまじと観察する。見た事があるような気がするのだが気のせい。

「面白みのねえ奴」

少年は反応の薄い俺が不満らしい。
大袈裟に驚愕でもすれば満足なのか。既に十分驚いた気がするのだが。

「あんた、何なんだよ。失礼な奴だな。つか俺の夢に勝手に出演してんじゃねえよ」

少年は不信を露わにする俺へとこれ見よがしな溜息を吐く。

「おいおいマジデスカ。テメエが死んだ事にも気づいてねえのかよ、夢じやねえつての」

目を見開く俺の様子に見ず知らずの少年は呆れ果てる。ついでに確信を突くような事まで言って除けた。

まあしかし、これで俺の疑問は1つだけハツキリした訳だ。薄々気づいてはいたが。

「やっぱ死んでんのか。じゃあ此処つて、死後の世界なのか？」

別段死んだ事が感慨深い訳じゃない。想像以上に虚しくはあつたが。死んだ後の事など考えていないのが普通だ。

「ホント面白くねえ奴だな。普通もつと驚くもんじゃね？」

「んなこたいい。それよかあんた誰だって。神様とか言わないよな

たしかに、正義の味方の殻を被った神モドキに似た少年だが。

その辺の推測は外れてほしいものだ。いくら現実離れした現象が次々発生しようと、2次元の人物がリアルに出現するのはやめてほしい。

「おっ、いい線いつてんじやん。つかもう気がつてんのかと思つたぜ」「いや、分かつてはいるんだ。アンリ・マコだよな。なんか突っ込んだ方がいいのか？」

この世の全ての悪アンリ・マコだつたか。

Fateシリーズの言峰とギルガメッシュに次ぐラスボス的存在。死後にそんなものが眼前に現れたとなれば、本格的に現実逃避したくなるのも仕方ない。

「そ、オレアこの世の全ての悪。アンリ・マコ」

ついに本人宣言がくだされた。

正直本人か本人じゃないかななどと言つた事は重要じゃない。最早何がおこりうが、動じない自信がある。

「その恶心殿が俺に何の用だ」

「そう急かすなって。順に説明してやる。めんべくせえけど」

本心から面倒臭さを全面に出すアンリ。

普段の俺だったなら不愉快に思つた態度を今回ばかりは完璧にスルーしてやる。

「まず此処は聖杯の中。オーケー？」

「聖杯だと？」

これ以上驚く事はないと思っていた。だがこの場合アンリ・マコがいる理由としては、納得のいく説明かもしれない。

「言つとくが、オレがおまえの魂を喚びこんだ訳じゃねえかんな

「魂…？」

「あー、死んでんだし生身な訳ねえじゃん

「言われてみれば……」

今更気づいた。感觸や感覚が無い。
今の俺は靈体みたいな存在らしい。

「リアクショーンうつすいなー」

「いや、もう十分驚いたしな」

「ま、いつか。んで、おまえを喚んだのは平行世界のおまえだよ。
厳密にいうと違うのかねえ……ま、似たようなもんだな」

聖杯。平行世界。魂。

聖杯があるのだからこの世界は Fate 世界なのかもしれない。
信じられないが信じられない事が既におこった後だ。最早信じない
訳にはいかない。

「その平行世界のおまえが聖杯に願つちまつたのがそもそももの原因
だ」

.....。

迷惑な話だが元凶は自分自身らしい。

此処まで聞くと与太話とは思わないけれど。複雑な心境だ。

「でも、あんたが中にいるなら願いは破壊の形でしか叶えられねえ
んじやないのか？」

「いやいや、んなこたアねえよ。実際おまえは此処にいるじゃねえ
か。つつても、破壊した聖杯の欠片をただの一般人が触つちまつた
ア思わなかつたがな。ケケケ」

「ハア！？」

「いや、オレも驚いたんだぜ。だが事実は事実だ。その時点で願い
は受諾された。ま、その代償が安い訳ないよなア？」

アンリ・マコは俺の驚愕を面白がるよつてヤーヤーと笑いやがる。

とはいって、俺はそんなものに構っている余裕はない。
つづく言葉の方に衝撃を受けた。

「肝心のソイツヤー、死んじまつてやんの」

笑えんなー、と腹を抱え爆笑。なんとも不愉快な笑い声だ。
だが俺は顔を顰める程度に留める。悪の容認者に注意するだけ無駄
な事だ。

話はだいたい分かつた。

「つまり、俺は代役つて訳か？」

「早い話がな。この世界のお前が聖杯に願った時軸とお前が死んだ
時軸と重なったみてえだ。たぶん聖杯に魂が引っ張られたんだろう
な。この世界のおまえの魂は消滅したみてえだしよ」

簡単にいうが、平行世界の俺と死ぬ時軸が重なる確率がどのくらい
だかたしかめようがない。

このまま第2の人生を歩めとでも言いたいのか。だとしたら冗談じ
やない。

「どちらにしろ、平行世界の「俺」の事なんぞ知るかよ。少なくとも
もゲームの世界なんかで生きていきたくないね」

「へえ。まあ確かにおまえの言い分は分からなくもねえけどな。此
処も一応、現実だ。どっちみちおまえの願いを叶えるにはおまえが
必要なんだよ」

「俺の、願い……？」

「ヒヒ、この世界の「おまえ」とおまえ自身が不可分な訳ねえだろ。
死んだ時間云々の話は嘘じやねえが、何かしら惹かれる要因があつ
た筈だぜ。ま、せいぜい足搔いてくれやーじゃあな」

「まッ！？」

用は済んだとばかりに遠のくマシコ・マコへ咄嗟に伸ばした手が宙を空振る。

いつのまにか、意識と共に体は闇の中に溶け込んだ。

血臭を満たした室内に恐怖を覚える。血の海の中から弟が救いを求め、懸命に手を伸ばした。

その時の弟は誰が見ても虫の息だった。現に、そのあまりにも惨たらしい惨状から、思わず後退りしてしまったのは俺。

あの時、その手を掴んでいれば何か変わっていたのかも知れない。そんな風に、過ぎ去った出来事を不毛にも延々と後悔した。

始めに訪れたのは不快な落下感。それはまるで、乗り物に酔つたような感覚だった。

自分の状態を知るために体を動かそうにも全身の激痛が酷い。それはその筈。つい先刻まで、この体は魂の無い肉体だったのだ。これは所謂死後硬直なのかも知れない。

仕方無く、地べたを這つた状態らしい俺は起き上がるのを諦めた。ひとまず鼻につく臭いに顔をしかめ、状況を把握するために目を開く。

「ツツー！？」

視界に入った光景を目にすると、知りたかった自身の状態を予想以上に察する事が出来た。

理解したと同時に、すぐに堪え難い壮絶な光景から目を逸らす。

「ぐ
」

込みあげてくる嘔吐感を堪えたぶん、息が荒くなつた。その光景は、俺のいた現実以上にやけに現実感のあるものだつたからだ。そう、乾いた瞳に写るのは灼熱の炎が人を焼く様子。臭覚、聴覚を狂わしたのは悲鳴、懇願、哀願の、ヒトの、声声声。

「なん、だ、これ」

喉が引きつる。

やつと出た咳きは掠れていた。だがしかし、これはあまりに不愉快な田覚めだ。

このまま不快な風景から目を瞑り、身を委ねれば、容易く俺は2度目の生を終わらせる事が出来るだろうが、そんな事をする訳にもいかない。

元々同一存在だった事も手伝い、この体の主の記憶が融合し現状を教えてくれた。恐らく、この時に、俺は「俺」に成ったんだ。

「そうだ。こんな事してる場合じゃねえ」

無理矢理体を動かしてみれば、痛みはないが、ぎしぎしと身体中が悲鳴を上げる。ただし体を動かすだけでわずかに残つた体力が、大袈裟なほど削られる。

「クソツ
」

その状態を省みれば分かる。俺がここのまま此処に留まつたとしても死ぬだけなんだと……。

「アイツが生きてんの確認しなきゃ死にきれねえっつうの」

俺はぐつ、と膝に力をいれ、立ち上ると、忌々しい漆黒の太陽を睨みつけた。

禍々しい太陽は、間違いなく第4次聖杯戦争がおこった証。何より、アンリ・マコが生み出されかけた痕跡が空に浮かんで見える。

「あンの野郎、状況説明ぐらいしろつてんだ。ふざけやがつて……」

憑依先の説明くらいして欲しい。

これは想像に難くない事だが、今頃この様子を嗤いながら眺めるのかかもしれないのだ。恨めしく思わない訳がない。思うように動かない体に苛立つ。こんな事をしている間にも時間が経過し焦りが生まれる。

記憶が確かならば、聖杯の欠片に触れた直後は「俺」が気絶した幼い弟を背負っていたのだ。だがその弟は今、俺の目の届く範囲にはいない。

「クソッ、何処にいるんだ！？士郎ツー！」

呼び掛けてみるが、勿論返答はない。ただ、燃えさかる火炎が音をたて、バチバチと身を踊らせるだけだ。

「お願いだ！いたら返事をしてくれ！」

徐々に歩ける程度にはなつたものの、焦りは増すばかり。幼い少年

がそれ程遠くへ行けるとは思えないから、尚更焦る。
もしかしたらあのまま火炎に焼かれたのかもしれない。そんなイヤな想像が過ぎつてしまつ。

「ふ、ハツ、ハア、流石に、息が苦しくなつてきやがつた」

それも当然か。炎に囲まれ、脱水症状寸前。加え、これだけ動き回れば仕方のない事だ。
まあだからこそ弟が心配なのだが。

「あー、これはやべえかもな。…と、ん？」

本格的に命の危機をかんじ始めたその時。

「……雨？」

ポツリ、ポツリ。

頬を濡らす感触に足を止める。驚くべき事に都合良く雨が降つてきた。

測つたかのような雨に眉を寄せる。

だが炎が消え、思つていた以上に視界が広がつたおかげか、捜し人はすんなりと見つかった。

「し、」

突然の事に目を見開いた。

咄嗟に呼び掛けようとするまえに、危なつかしくふらふらと歩く少年のうつろな瞳が此方に向けられる。
その瞬間、少年の体が傾いた。

「士郎……」

そこで漸く俺は「俺」の弟の名を叫び、弟の下へ駆け出した。弟、士郎を倒れる寸前に支える。

「だれ？」

「おまえは、俺が分からぬのか？」

辛うじて意識を保つている士郎が頷いた。

今にも軽すぎる体の重みが失われそうな雰囲気を纏っている。そのせいが無意識に士郎を支える手に力が籠もった。

そうでもしないと不安に押し潰されそうになる。自分はまた後悔する事になるんじゃないか。

「、う」

「あ、悪い。痛かつたか？」

士郎の顔が苦痛からか歪んだ。しかし、気遣いから力を抜いた俺へと士郎が手を伸ばした。

「な、んだ？」

「かなしい、の？」

「え？」

悲しいのかと問うてくるその瞳の方が余程痛々しい哀しみを宿していた。もしかせずとも、士郎が苦しげなのは自分のせいなのか。自分が悲しませているのか。

ボンヤリと理解した俺は再び悲しみに暮れる。

「……おまえは人の心配より自分の心配だけしていればいい

やるせない。

今の士郎の記憶は完全な空白状態。死への恐怖はないのかかもしれない。

いや、それくらいの自意識はあるのかもしれないが、士郎の場合優先すべき順位が自分じやない、他人なのだ。

「うん」

士郎は俺の言葉を聞き、微笑んだ。その笑みが俺を息苦しくさせる猛毒とも知らず。

かんじる必要のない罪悪感が胸をざわつかせた。

アンリ・マコが言った「俺」じゃない俺の願いが分かつた気がする。この世界の「俺」の願いが「士郎に生きていて欲しい」事だとしたら、俺の願いはこの罪悪感（後悔）から救われる事だ。だから、彼のために生きるのは悪くないと思った。

煉獄回調（後書き）

今回のお話の補足。

弟を見殺しにしたと思い込んだ罪悪感が、ある種のトラウマとして植えつけられ、FATE世界の士郎を見殺しにした弟とだぶらせた末、自分の世界の弟に出来ない贖罪を士郎にしたい、守りたいという強い強迫観念が主人公の中に生まれました。

分かり難いかもしれないから補足しどきました。

覚醒後の世界は変わっていた。

月姫の志貴もこんな気分だつたのかもしれない。俺の「眼」に視える世界は、たしかに壊れかけた世界だ。その事実が何を意味するのか、そんなものは理解したくも無かつた。だが分かつてしまつたものは仕方がない。

「…直死の魔眼？」

俺もこれには茫然とするしか無かつた。
何せ、今の俺から視れば、この世界は容易に壊れ易いものに見えるのだ。原作を知らなければ、頭がおかしくなつたのかと自分を疑つたとしても不思議はない。

その後、原作同様衛宮切嗣に助けられ、現在の状況を顧みるに此処は病室らしい。白い病室の其処彼処に生命線のような「線」と「点」が見える。

「なんか、気味悪い」

死の後遺症みたいなものなのかもしない。嬉しくない奇跡がおこつてしまつた。迷惑な事だ。

こんな代物は危険以外の何ものでもない。固有結界保持者が身内にいるだけでも厄介なのだ。魔術師や教会に知られてしまつたが最後、最悪狙われるだけじやすまない。

「…なんだ？」

溜息を吐く所か、逃げ出したい衝動に掻られたが、視界は前触れも

なく正常に戻った。

唐突な変化についていけず瞬きを繰り返す。

「おいおい。いつたい何なんだよ」

「あ、お兄ちゃん。もう起きてもだいじょうぶなのか?」

訝しげに首を傾げる俺に覚えのある声が掛かる。

「土郎!」

「へ? わわ! ?」

隣のベッドから上体をおこした土郎に飛びつく。俺の行動が予想外だつたのか土郎は戸惑いを露にした。

騒がしい俺達の様子に興味を惹かれた同室の子供達の注目を集める。そんな周囲に気づいた俺は苦笑した。

「あ、いや、悪い悪い。つい」

「う、うん。べつにいいけど。田が覚めたんならお医者さん呼んだ方がいいんじゃないかな?」

「ああ。その前に聞きたいんだがあれからどれくらいたったんだ?」

「2日だよ。おれも少し前に田が覚めたばっかなんだ」

外傷といえば、頭と手足に包帯が巻かれているくらいだ。多少の火傷は致し方ないだろう。意識を失したせいか少しばかり頭がズキズキする。

土郎も俺と似たようなものだが、2日しかたっていないにも関わらず、やけに元気だ。

「まあのんなもんか。つかおまえはもう大丈夫なのか?」

「おれ?」

「おまえ、下手したら俺より重傷だつたと思つたんだが…」

「ふうん？」

目を丸くする士郎に納得した。

元々士郎が助かつたのは理想郷アガアロンが埋め込まれたからだ。

あの聖遺物が並みの回復力な訳が無かつた。

「ま、その事は今はいいか。それよりその様子じゃ俺の事は全然覚えてないみたいだな」

「え…覚えてるよ？お兄ちゃんが俺を助けてくれたんでしょう？」

「いや、あの大火災より前の記憶の事だ」

「あ……。えと、あの、もしかしておれと知り合いだったのか？」

士郎が申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「知り合いつつうか、なんつうか…」

兄弟だつたんだが。

あまり期待をしていた訳じやないが、本人に訊かれるのも意外と複雑なものだ。

言葉を濁した俺を士郎が不安げに見つめる。勿体つけた態度が不安を煽つたらしい。

「あの？」

「いや、悪い。まずは自己紹介からだよな。俺は夕土。よろしくな」

「あ、ああ。おれは士郎。お兄ちゃんは知つてゐるみたいだけど」

戸惑いは拭いきれていない答えた。まあとはいゝ、不信がられるよりは幾分かましか。

初見じやない事が幸いしたのか士郎の態度は随分気易い。あんな事

があつたばかりな上に記憶まで失つた人間だとは思えない程だ。これは俺が影響を「えたせいか否か。それは分からないが、これ以上混乱をせぬよつた事を告げるべきか悩む。

「あー、土郎。あのな、実は…」
「分かつた！」

歯切れ悪く口籠もる俺の言葉を土郎の明るい声に遮られた。タイミングがいいのか悪いのか分からない。

「お兄ちやんはお兄ちやんなんだな？」
「…は？」

田を点にする俺の反応がいけないのか土郎が不満げに唇を尖らせる。何の脈絡無くそんな事を言われて困る。

「だから、もしかしたらなんだけど。おれとお兄ちやんが兄弟なんじやないかと思つたんだ」

「土郎、おまえ…」

驚いた。

土郎は俺の躊躇をものともせず、血の匂づいたのだ。

「な、何故そんな風に思つんだ?」「いや、だつて、あの時おれのなまえを必至に呼んでただろ?」「え、あ、ああ。まあな」

たしかに、あの時は必至だつた。

平行世界の「俺」の過去がこの世界の俺とだぶつた所為もあるけれど。

「あんなに必至だったから、だな。やっぱ。おれ、凄く嬉しかった。
お兄ちゃんが来てくれた時、なんか安心したっていうか…。でも、
お兄ちゃんは友達つてかんじじゃ無かったし、それじゃあ家族かな
と思って…。違ったか？」

全部勘だけで其処まで推測したのか。子供にしては大したものだ。
実際正しかった。

内心の動搖が漏れたのか、はにかんだ士郎の微笑みが俺を気遣つた
ように見えたのは、多分氣のせいじゃない。
俺は「衛宮士郎」の片鱗を目のあたりにし、口唇が戦慄いた。
この「士郎」に「正義の味方」を口指すキッカケを与えたのは俺な
のかもしれない……。

新世開幕（後書き）

今回のこと、兄さんは更に十郎を守らなければならぬこと責任（脅迫観念？）を強めました。

こんな兄やるとくつしつくヒロインが想像つきません。
くつしつくまでのストーリーも難しそう。

今のところ、ヒロイン候補はイリヤと凜と桜。

父子姫弟（前書き）

単なる兄やんと切嗣の不毛な会話。
つか切嗣の口調がよく分からぬ。

父子師弟

朝のぴんと張り詰めた空気が道場内にも浸透する。

だがその空気を破るように俺が間合いへ踏み入れた。そんな俺が攻撃するより早く、先に動いたのは切嗣。

無駄のない動きが俺の胴を捉える。

しかし異常な反射神経のおかげか、脇腹を掠った程度に済んだ。痛みが後からじくじくひろがっていく感覚がなんとも言い難い。

掠つた程度なのにこれだけの威力だ。当たればたたじや済まない事が分かる。

分かつっていても追撃は避けられない。

「つづー！」

予想以上の激痛だ。

無防備な左肩を竹刀が抉つた。

危なげによろける足を踏み留める。

まあ始めて比べれば、膝を着かないだけ成長した方だ。これ以上の深追いはしない。

「参った。降参だ」

手を挙げ、その場に座り込んだ。

「お疲れ様」

「ああ、お疲れさん」

タオルを渡され、緊張感から溜めていた息を吐きだした。

雰囲気が幾分柔らかくなつた切嗣が父親らしく背を擦つてくれる。

スイッチのON・OFFの切替が出来るのは1流の魔術師の証拠だ。切嗣は魔術使いだが、1流にそんなものは関係ない筈だし。

「だいじょ「ぶかい？」

「問題ねえ。つうか俺、こんなにホントに強くなつてんのかよ
「はは、自分じや気づかないものさ。タ士は十分成長してるよ」
「でもさあ…」

俺が魔術指南と戦闘訓練を受けるために漸く切嗣の説得に成功したのが半年前。切嗣に引き取られたのが3年前。原作に突入するまでに後7年もない。

通常の子供よりは身体能力は異常だが、魔術の才能がない分、焦りは深まるばかり。しかも切嗣とばかり鍛錬しているせいか、強くなつた実感があまりない。

「タ士、君は何をそんなに焦つているんだい？」

「やつぱり切嗣には分かるか？」

「そりやあ僕は君達の父親だからね」

そんなことに胸を張つて言い切つた切嗣の方が子供みたいだ。
なんだか意地悪したくなるじゃないか。

「ふふ。家事全般を子供にやらせる父親ねえ」

「あ、ははは。……面白ない」

「分かればよろしい。俺はだいじょ「ぶだ」

魔術以外の事には、とことん情けない切嗣に口元を緩めた。

まあ、とはいえるのとこ、その情けない父が魔術指導を頑なに嫌がつたがため、最終手段に「俺の眼」の事を渋々明かす事になつた訳だが。

「もしかして、原因はその「眼」かい？」

答をはぐらかしたつもりだったが、切嗣の方にそんなものは通用しないし、はぐらかされるつもりも全くないらしい。

たしかにこの「眼」があるのは何かと不便なこともある。ふとした時に唐突に「死」を眼にしてしまうがあるくらいだ。

ただ、聖杯からのバックアップのおかげか、原作における直死の魔眼の使い手たる遠野志貴や両儀式らと違い、「死」を見る時の切替が可能な事だけは有難い。

正直、恐くないといえば嘘になる。当然、切嗣にも土郎と自分以外には絶対誰にも言わないように言われている。魔術教会や協会に知られる訳にいかないから。

「なんで、そう思ったワケ？」

「人は恐怖から力を求める事もある」

「違えよ。そんなんじゃない。恐いってのはたしかにあるがな」

やはり聖杯戦争の事は言えない。連鎖的に、何故知っているのかを言わなければいけなくなる。なるべく俺はそれをしたくはない。魔術や魔法が存在する世界なのだ、真剣に説明すれば切嗣なら俺の境遇を信じてくれるかもしだれないが。呪いに侵されつづける切嗣に、これ以上負担をかけたくはない。

「じゃあ、他に思い当たる事と言つたら、土郎に関係した事かな」

「

咄嗟に口にする言葉が思いつかない。

恐らく図星だったからだろう。俺は観念して、諦めの溜息を吐いた。

「やつぱり、切嗣には適わないな。そつわ。俺は士郎が心配なんだよ」

「夕士が何か悩んでる時はだいたいが士郎の事だから。僕は君には他の事にももつと目を向けて欲しいんだけどね」

「いや、こればかりは無理だな」

自分がかなり過保護な自覚はある。既に性分とすら言えるかもしれない。士郎からしたら鬱陶しい事かもしけないが。やはり士郎の未来を考えると心配事がたえない。

士郎は勿論のこと、俺も面倒事ばかりを抱えている身の上。だからこそ、士郎を守るために俺自身をも守り通せる程の力が必要なのだ。

それ故に焦つてしまつのは仕方のない事だ。

「士郎の何が心配なんだい？あの子は年の割にはしっかりしているよ。君とおなじでね」

「そんな事は俺だって分かってる。俺が心配してる理由なんか言わなくても分かつてんだろ」

切嗣の誤魔化した物言いに眉根を寄せた。

声には少しばかり剣呑な響きが混じった。切嗣は渋面を浮かべた俺に苦笑する。

「魔術を教えた事なら悪かつたよ。でも、「夕兄に教えておれに教えないのは不公平だ！」なんて言われちゃつたからね。僕も強くは断れないさ」

「まあ分かつてはいるんだけどな

そう、理解してはいるのだ。正直、俺は士郎が魔術を知る事にもあつかう事にも反対だった。

だがアヴァロンが埋め込まれた以上、魔術と無関係のまままでいる方が難しい。何も知らない方が危険な事が多い。

「俺なんか伝説級の代物を持つてはる上に士郎の魔術は異端だ。尚更心配なんだよ」

調べた結果、士郎の属性は原作同様の「剣」。

伝説級の魔眼持ちの俺もだが、魔術師に狙われても不思議じゃない。それも魔法に最も近い魔術といわれる固有結界の持ち主だ。魔術を全く知らぬまま暮らすのも一つの選択だったのだが。これは俺の個人的な願いにすぎない。

「俺は士郎を守れるくらい強くなりたいんだ」

「そつか。だけど、無理をする事と頑張る事はちがうよ？」

「ん。なんか悪い。俺の方が心配かけちまつてるよな。気をつける」

「そつしてくれると助かるな。焦つても疲れるだけだよ」

ポンポンと幼い子供をあやすように頭を撫でられる。そんな切嗣に悪戯を思いついた子供の笑顔で言った。

「でも、兄貴は弟を守るもんだろ？」

それだけは譲れない。

父子師弟（後書き）

兄やんの士郎病は止まらない。基本的に士郎が基準の生活。士郎以外の事には無頓着なんです。

切嗣の事を蔑ろにしている訳じゃないですよ。一応尊敬も感謝もしてますよ。

あ、兄やんの魔術の才能については士郎よりちょっととまし程度。まあ無敵？の眼があるし才能がちょっとないくらい良じよね。多分最強じゃないし。

「夕兄。電気代節約のために外に遊びに行くぞ」

そんな事をのたまつた土郎の発言に啞然した。

我が家家の家計に力をいれるのはいい事だ。切嗣はお金に無頓着なとこがあるのでし俺達がしつかりしなければいけないのは分かる。しかし、こんな真夏日に外出する必要性があるのか謎だ。電気を使わずに屋内ですごせばいいじゃないか。

「正氣か？」

啞然した俺はつい真顔で訊ねていた。神妙に頷いた土郎の様子に、これ以上追求するのも馬鹿馬鹿しくなった。

観念した俺が仕方無く付き合わされたのは炎天下の公園。その公園は述べるまでもなく凄まじく暑かつた。

「蒸れる。暑い。死ぬ。帰りたい」

「夕兄煩いぞ。来たばっかりなんだから帰る訳ないだろ」

途端つらつらと並べた単語を土郎に切り捨てられた。

最早、この暑さをひきおこす太陽しか恨める対象はない。

「夕兄ー！ ブランコしようぜー！」

だがそんな鬱々とした俺の気持ちは土郎に届く筈もなく。はしゃぐ土郎に手を引かれる。

暑い中辟易すれど土郎の言葉を聞き入れない訳にはいかない。

「分かった、分かったから引っ張んな」

「早くー」

幸いといえばいいのかはべつとして、公園に子供はない。日陰で子連れの奥様方がお喋りしているぐらいだ。

この暑さじや遊ばない方が賢明だが。士郎は公園を貸切にした気分なのがやけに嬉しそうだ。

「兄さん! 待ってください!」

「ついてくんなんよー!」

とはいって、本当に貸切った訳じゃない。

見知らぬ兄妹が公園に乱入する可能性も少なからずある。

「待つてくださいー兄さんまで、わたしを置いていかないで!」

しかも、何やら兄妹で痴話喧嘩のような会話を繰りひろげ始めた。既に「兄を健気に追いかける妹」の図が「男に別れを告げられ追い縋る女」にしか見えない。2人に気づいた士郎もきょとんとした顔でその茶番を眺めている。

「バツ…! 違つげえよ…! 僕にも少しくらい1人になりたい時があるんだよ。だから、おまえも偶には僕についてくばつかじやなくて、友達と遊んだりすればいいんだ」

「兄さん……」

しかし思つたより案外昼ドラマ風味の感動的な話だったようだ。兄の方が相当不器用な奴らしい。

驚く妹が気に食わないのか兄が照れ隠しに鼻を鳴らし、そそくさと踵を返す。

「わ、分かつたらついてくるなーいいなー!？」

「え? 兄さん! ?」

「あ……」

俺と士郎の目の前を通過した兄を追つて来た妹が躊躇した。やはり目の前で転ばれては手を貸さない訳にはいかない。

「おい。君、だいじょうぶか?」

「ふえ…。だれ?」

渋々手を貸し、近くから見た少女は、全体的に見ても色素の薄い儂げな美少女だった。

涙目の中年女性は内心おおいに狼狽え、表面上は人好きのする笑みを浮かべ、無理矢理立たせる。

「あ、あのあ?」

「怪我はないな?」

「う、え! ?え、えと、はい! へいきです!」

助けあこした事に気づいたらしく、暫く瞬かせていた丸い瞳がきらめく輝く。

少女は花が咲き誇ったように微笑んだ。

「お、おまえ! 僕の妹に何してんだよッ!」

見惚れかけた俺を不躾な声が正気に戻した。

少女との間に飛び込んだ少年は、先程去つたと思い込んでいた少女の兄らしかった。その兄が妹を庇つかのように視界を遮る。

「兄さん！？」

「桜。おまえは下がつてろよ」

敵愾心を剥き出しにする桜の兄に無実の罪を着せられ威嚇される。誤解も甚だしい行為に流石の桜も口を開いた。

「待つてください兄さん！…その人は何も悪くありません…転んだわたしに手を貸してくれただけですシ」

強引な兄へと氣弱な印象の桜が声を荒げる。
珍しい桜の強気な態度に兄が驚く。

「ハア！？だ、だつたら早くそういえよな…！」

「『めんなさい、兄さん。それに、あなたにも』迷惑をおかけして…」

「べつにそんなに気にしてねえからいいよ。それに俺にも弟がいるから気持ちは分かるしな」

苦笑した俺が士郎を見た事に気づいた桜が慌てて会釈する。その様子を模倣した士郎も会釈。
微笑ましい光景に和んだのも束の間。そこへ水を刺す存在を忘れる所だった。

「か、勘違いするなよ！…べつに僕は桜の事を心配した訳じやないんだからなッ！」

桜の兄らしい少年。

正直な話、男のツンデレなど士郎以外がした所で氣色悪いだけだ。整った顔とウエーブがかつた髪質にも無駄に腹立たしくなる。
加え、桜のなまえとこの兄の性格にも嫌な予感しかしない。俺は、

すぐ」「この場を去らなければいけない気がする。

「分かった分かった。んじゃ君、今度は氣をつけろよ。士郎、行くぞ」

「うん。じゃあな」

「あ、おいー」

この際兄の方の呼び声は無視しよう。

このまま関わらずに済んだ事にホッとした。

「あのッ！わたしのなまえは間桐桜です。あなたのおなまえを教えてくれませんか？」

「桜？」

「……」

けれども、大声で呼び止められれば足を進める訳にもいかなくなる。そんな自分に呆れる。無視すればいいものを士郎が気にするから出来ず、嫌々ながら振り返った。

結局この出会いも「運命（FATE）の世界」の予定調和に過ぎないものなのかもしれない。

「……衛宮夕士だ」

「お、おれは士郎。衛宮士郎！」

その時が初めてだったかもしれない。否、初めて、「間桐桜」と正面から対峙した。

だからか、余計に自ら名乗つたその声は俺の心情を露にするようにな機嫌なものだった。

桜花乱舞（後書き）

多分士郎が8才で兄やんが9才くらいの話。

時系列なんかかんがえていません。

だから前回より前の話が出ても気にしたら駄目です。

何故だか俺は冬木市に一つしかない中華飯店泰山にいた。正確には言峰綺礼に連れ込まれた。

そもそも、学校の帰宅途中なんかにこの男と遭遇してしまった事が運の尽きだったのだ。俺のステータスには「幸運・E」が表示されること間違いないし。再会した相手がそのくらい会いたくない人物だ。有り得ない事じやない。

運命は何処までも俺に残酷だ。

「丁度よかつた。君とは一度じつくりと話をしてみたいと思つていた」

「俺は話なんかない。帰らせてもらひ」

「まあ待て。此処まで來たのだ。私お勧めの麻婆を奢つてやらひ」「結構だ」

「遠慮する事はない」

「遠慮じゃねえよ、腐れ神父が」

無表情に言い放つ。

この男はとことん人が嫌がる事をしたがる。ある意味この男こそが世界の害悪の元凶だとすらいえよう。

まあ「」覽の通りこの調子なのだ。極力感情を顔に出さない方がいい。顔を顰めたところで、この男を悦ばせるだけで俺が気分を害するだけだ。

「しかし偶然とはい、再びおまえとまみえる日が来ようとはな。神に感謝せねばなるまい」

「何が神に感謝だよ。勝手にお祈りでもなんでもしてやがれ似非神

父

「そういうな。これも何かの縁だらう」
「笑わせんな。反吐が出んぜ」

そんな縁などこの俺が粉微塵に粉碎してやる。
昔の俺ならこんな怪しい男の話など耳も貸さず本当に家に帰ったかも
しれないが。今の俺はこの男の破綻ぶりを知っているが故に話が
気にかかる。

癪だが聞くだけ聞いてやる事にする。

「話はなんだ。とつとと用件を言え」

「クク。我慢の効かん奴だ。そのまえに頼みたいものがあれば頼め。
私は元々食事のために此処へ寄つたのだ」
「おまえに借りなんぞつくれるか」

吐き捨てた俺を言峰が愉しげに嗤つた。相変わらず気味の悪い男だ。
こんな男に食事だらうとなんだらうと借りはつくりたくない。

「あの時教会でも思つたが、君は随分成熟しているようだな。それ
はあの「大火災」が原因かね」

あの時とは、つまり黄金のサーヴァントの餌となる運命にあつた孤
児達を助けた事にあるらしい。まあ10年後に土郎が知つたら
必ず罪悪感を抱く事など分かりきつていて。そんなものは許容出来
ない上に、無視出来ない事だ。この際他の人間が襲われても俺の知
つた事じゃない。

言峰自身は切嗣のお節介か贖罪だとでも考えたかもしねないが。孤
児達の引き取り手を考えたのは俺だ。実際、俺の提案を賛成した切
嗣にどんな考えがあつたのかは詮索しない。

教会へ訪れた機会はその時の1度だけだ。この男は自分を死んだと
思い込んでいた切嗣の動搖を面白がっていた。忌々しい男だ。

未だにこの地の管理者たる「遠坂」にも「衛宮」の事は言つていな
いようだしつぐづく油断ならない。

「ま、ある意味当たつてるかもな。あんたら魔術師のくだらねえ諍
いなんか無かつたら、俺は今ここにいないワケだし」

「フム。衛宮切嗣から真相を聞いたのか。それにしては随分冷静だ
な。君は私が憎くはないのかね」

意外そうに俺を值踏みする言峰。

言峰の事だ、俺が切嗣の息子だから呼び止め、反応を愉しみたかっ
たのだろう。だが当の俺は思ったような反応が返らないのだ。だか
らこそ逆に興味深いみたいだが。
それも迷惑以外の何ものでもない。

「……すべて、既に終わった事だ」

その聲音は常にないくらい冷めたくなる。あまりにぐだらない問い
だつたから余計だ。

しかし言峰は興味が増したのか、玩具を見つけた子供のように瞳を
輝かせた。

「そりゃ。では問おうか、衛宮タ士」

成る程、次の問い合わせがもつとも言峰が訊きたかった質問か。

「もしも過去をやり直せるとしたら、君はやり直しを望むか
「願いを叶える願望器。聖杯か？」

「君ならば私の言いたい事も分かるのではないかね？君は聖杯を手
に入れたくはないのか？」

「いや。人間、あんなもん欲しがると碌な目に遭わねえからな。

俺は貰えるもんは貰つとく主義だが、命張つてまで欲しいア思わないね。それに冬木の聖杯は切嗣が破壊したじやないか」

「真実、あの聖杯は無くなつた訳じやない。

だが言峰は俺の白々しい言葉をあたかも関心したように頷いた。

「ほつ。たいしたものだな。其処まで知つた上で、おまえに私怨はないというのかね。いや、そんな君だからこそ断言しよう。この先、後数年もすれば再び聖杯は現れる」

「……へえ。断言した理由については言及しないが、仮にその話がホントだとしても、んなこと俺に話しても良かつたのか？」

この男の愉快げな笑みも大概白々しい。出来る事なら、早々と殺してしまいたいものだが諸々の事情のおかげで、ソレは出来ない。今この男が不可解な死に方をしたら管理者たる遠坂セカンドオーナーが不審がる。何より、あの王様が現界しつづけたまま野放しになるし、俺の存在にも目をつけられる。

こんな男だが、今はあの傲慢王の抑止力だ。最悪死にかねない。

「何、問題ない。この地の魔術師ならば何れしれる事だ」

「たしかにな。だがたとえ俺がマスターに撰ばれたとしても、俺の願いは聖杯に叶えてもらわなくともいい」

俺の願いを叶えられるのはただ一人。

聖杯に叶えてもらつような事じやない。

「そつか。やはりおまえも衛宮のものとこつワケか」

「……おまえ、俺を試したのか？」

無表情を崩し、睨みつけるが言峰が動じる訳がない。

愉悦の笑みさえ浮かべている。

そんな両者の間に麻婆豆腐が置かれた。

「アイ。マーボードーフおまたせアル

途端、言峰の方の雰囲気が急変した。

俺の方は置かれた赤い煮釜に目を奪われる。

「漸く来たか。……ム？なんだ少年。食べたかったのかね。生憎こ

れはやれん」

「イッ！？んなもんいるか！？」

神父甘言（後書き）

オチ（笑）が微妙だったかも…。
つかこの話 자체微妙ですね。すいません。
私もこんなムサいおっさんじゃなくて女の子を出したいんですけど
ね。

中々話が進まなくて困っています。

過去編？はまだ何話かやる予定。

血鷦鷯（前書き）

十郎と兄やん。

兄やんの兄貴りつせつを發揮するお話。

その事件をおこした原因は酷く不愉快なものだつた。

元々、俺や士郎が浮いた見た目だつた事がおおきかったが。イジメと呼ばれる行為に拍車をかかつた大元は、いつ何処から漏れた情報かしれないが、あの大火災の遺児だと知られた事にあつた。

時には暴力的に晒された事すらあつたが、どんなに人数が多くとも俺が負ける筈も屈服する訳も無く。鬱陶しくはあれど、身も心も傷つく事は無かつた。

しかし、免疫のない士郎からしてみれば、幼い子供の悪意ある言動は傷つくばかりだつた筈だ。そこへ集団リンチに遭えば苦痛は計り知れない。

全く歯が立たない俺への攻撃を諦め、士郎の方に全ての悪意が向けられたのだとしても不思議はない。

まあその事が余計に俺の神経を逆撫でする原因になつた訳だ。なんと、頭に血が上つた俺はその場にいた少年達を半殺しにしてしまつた。

「『めん』

俺が安易に怒りに身を任せたおかげで、転校せざるを得なくなつた。道連れにした士郎には謝るしかない。

今頃、事の騒動を収めるために奔走している切嗣には特に迷惑をかけてしまつた。あの温厚な切嗣に平時に殴りかかるるへういんだ。怒りの程が伺える。

「……」

自室のすみでうずくまる士郎から返事はない。

正座した俺はますます居たたまれず、顔をあげられなくなる。

「すまない。おまえが報復対象になる事くらい予期すべきだつた。
こんな事になつたのも俺の所為だ。謝つて済む事じやないかもしけ
ないが、ホントに悪かつたな」

眉尻を下げた情けない謝罪に効果があつたとは思えないが。
悲痛に歪んだ顔をした土郎が必至に首を振つていた。

「夕兄は何も悪くないよ……」

「土郎？」

土郎が何かに思い詰めたように暗い。

これは俺より自責の念が強いかもしれない。

「いや、そりやあれはやりすぎだつたかもしれないけどさ。でも夕
兄が全部悪い訳じゃないよ。……鬼に角、ごめん」

「おいおい。なんで、土郎が謝るんだ？」

「……」

土郎が再び俯く。

俺は吐きたい溜息を飲み込んだ。

「言いたい事があんなら言え。俺は魔術使いだが、人の心が読める
訳じやねえんだ」

「俺、も殴つた、から」

ボソリと口にした言葉が妙に耳に残つた。

呆気にとられた俺に何を思ったのか土郎の眉尻から涙が滲んでくる。

「えーおい、士郎！男がんな簡単に泣くんじゃねえー……つづかおまえに泣かれると俺が困るじゃねえか」

「……1発、だけど……俺も、殴ったのに……」

「おまえなあ！たかが1発くらいなんだよ。おまえなんかなんも悪い事なんかしてねえのに何度も殴られたじゃねえか」

「でも……」

訊ねるまでも無く分かる事だが、お優しい俺の弟は自己嫌悪に陥ってしまつたらしい。

集団暴力を受けた士郎の方が遙かに酷い傷を負つたにも関わらず…。これでは責任をかんじている俺が馬鹿みたいだ。

今回の事は俺が原因だしイジメの主犯者が悪い。士郎は全く悪くない。むしろ後何発か殴つても許されるんじゃないかとも思う。

「おまえは深刻に悩みすぎなんだよ。じゃあ訊くがな。もし他の奴があまえとおなじ立場だつたら、おまえは何もせず黙つて見ていいれるのか？」

「や、そんな訳ないだろ！助けるに決まつてるじゃないか！」

予想通りの返答に呆れつつ、溜息を吐く。

「どうやって？」

「それは…ッ」

「話し合いなんていわないよな？」

これも予想通り言葉を詰まらせた。

正義感の強い士郎が容易く人に手を出す訳がない事くらい分かる。まず話し合いをしようとする事も同様に予測出来る。

「あのな、士郎。誰かを守るためにには誰かを傷つけなければいけない

い事もあるんだ。俺が今回してしまった事も士郎を守りたかったからだし、勿論自分自身を守るためでもあった。だがおまえは意味無く人を傷つけるような奴じやない。だからおまえは絶対悪くない。悪いのはおまえに殴られた奴の方だ」

押し黙つた士郎に微笑みかける。

「……でも、そんなの……」

漸く開いた口が納得いかないと呟く。
士郎が人を殴つた程だから、おおかた俺や切嗣の事を中傷されたのだろう。それでもお人好しの士郎は罪悪感が沸くらしい。
呆れてものもいえない。

「正しい事を正しいと言えるのはいい事だ。だが互いの正しさを主張し、押しつけ合い意見を違えてしまったなら、ぶつかるしかない。自らの正しさを通していんならな」

「夕兄のいう事つて、時々凄く難しくって、よく分かんないよ」

困ったような顔をした士郎の橙色の頭が、すっかり沈み始めた夕焼け空と重なつた。その頭をくしゃくしゃと撫でると、士郎が唇を尖らせる。

「ま、今は分かんなくてもいいさ。つまり何が言いたいかつひとつ、おまえは全然悪くないんだってことだなー!うん!」

「やっぱ夕兄つて、意味分かんない」

不服げに拗ねてしまつたものの、手を振り払わない幼い弟に苦笑した。

あの過剰な暴力事件が既に落着したことは、記憶に新しい。

勿論、転校した先が必ずしも安心とは限らない事も分かつていてつもりだつた。だが半年早々に目をつけられ、放課後の人気ない体育倉庫前に呼び出しを受けたのがつい先刻。

そんな事をしたくならない少年達は俺の足下に蹲つたまま動かない。

「衛宮君。あなた、強いのね。でもそれはないんじゃないかしら」

その場に相応しくない可憐な少女が言った。

学級委員だからか、正義感が強いのかお人好しだったのか、見過ごす事が出来ずに様子を見に来たらしい。まあ1人に対し、複数人につけられた知り合いを心配するのは、普通かもしれないが。しかし、俺個人としては、わずか8人で挑んできた名も知らぬ彼らの無謀を賞賛したい。

「なんの事だ？」

「あなたの下にいるソレよ。今時まんがでも見ないわよ？」

「ああ」

漸く俺の椅子になっているものに気がついた。

俺が違和感無く座り込んだ下には、つい数分前俺自身がのしてしまつた少年じだからがいる。

彼女の気配が遠のくまでは休憩しようと思っていたのだが、困った事に大元の気配の方が自分から現れた。

「べつにいいじゃねえか。んな事より、おまえはこんなとこに何しに来たんだ？」

「わたしが何処で何しようがあなたには関係ないじゃない」

赤面した彼女がつんと顔を逸らした。素直じゃない。これが世に尊のシンデレ少女かと思わず関心する。
俺自身はシンデレに興味はないが。

「はは、心配してきてくれたんだよな。ありがとな

「 ッ

外れていないのでから反論しようにも反論出来ないようだ。それに、
彼女は否定する程に子供でもない。

彼女は飲み込んだ言葉の代わりに溜息を吐いた。

「もしかして、私が後を着けていた事に気づいてたワケ？」

「まあな。いやあ、君みたいな美人に心配してもえるなんて、光榮
だな」

「……あああ！もおおおーなんなのよーーあんたはッ！」

今度は照れたせいで火照った頬が、対照的に怒りで顔が紅潮する。
からかいすぎると爆発するのが赤い悪魔の特徴だ。

「いやいや。それは俺の台詞だね。結局のところ分からないんだが。
遠坂凜、君は何をしに来たんだ？」

目を細めれば、遠坂が眉を顰める。

実際彼女は仲裁のために来たんだろうが、俺に必要のないことは分
かった筈だ。だったら、他に何か言いたい事が用があつたんじゃない
のか。

「たいした事じゃないわ。少し忠告してやろうと思つただけよ。あ

なたは以前の学校でもおなじよつな事をして、転校してきたみたいじゃない」

「勘弁してくれ。もう、そんな事まで噂になつてんのかよ」

「嘆く前に、自分が目立つこと自覚した方がいいわよ?」

にっこりと笑顔を浮かべる赤い悪魔こと遠坂。

小学生の少女が浮かべるものじゃない。口元がひくひくと引きつる。

「つつても困んだよな。外見に関しちゃビリしきょうもないワケだし」

「手っ取り早くその髪を黒く染めれば?」

「染めねえよ。元々これは地毛だ。染める必要なんかないね」

たしかにこの朱色の髪は目立つ。俺や士郎が反感を受ける理由の大半は、この髪が原因だ。朱と橙の髪なんか中々ない。

だがこの容姿は、この世界の「俺」の両親の唯一の形見みたいなものだ。そんな理由では捨てられない。

「そう。あなたがそういうなら無理にとは言わないわ。ま、折角綺麗なんだし勿体無いものね」

「……綺麗?」

あまりにも普通に言われたおかげで、反応が遅れかけた。俺は意外な人物からの言葉に目を丸くする。

俺の様子に今頃気づいたのか遠坂が再び顔を真っ赤にした。

「力、カミツ!髪の事よ!?当たり前じゃない!?!」

「いや、そんな焦んなくて分かつてるが」

「わ、分かつてんならいいのよ。……兎に角、あなたは少し周りに気を配るべきだわ。分かつたわね?」

「あ、ああ」

恐い顔をする遠坂に気圧され、頷く。
遠坂はそのまま走り去ってしまった。

「いったい何なんだ。遠坂の奴」

心配してくれたのは分かったが、照れたのかなんなか彼女の行動には首を捻った。原作の遠坂の性格を考えるとメリットや好意がなければ、ただの知人をこんなにも気にかけない筈なのだが。原作でも面倒見はよかつた事にしても、あれは元々彼女が士郎に好意があつたからだ。影から見守る妹の桜の知人だった事も関係あつたかもしだいが。

「……この場合、桜関係か？」

時々、公園に居合わせれば遊んだり話したりするぐらいには、俺が桜と仲が良いのを知っていたのかもしれない。たしかに、俺に何かあれば桜が気にする。まあどんな理由にせよ、遠坂がいない方が都合はいい。

微量といえど魔力をつかう事になるのだ。彼女が近くにいれば、バレる恐れがある。聖杯戦争が始まれば、バレる事にはなるが。今バレた場合の言い訳が面倒だ。原作時にバレた時に深い追求を免れる事が出来たのは、非常時の聖杯戦争だったからこそだと思われる。たかだか軽い暗示をかける程度だが、士郎に迷惑がかかるかもしれないのだ、慎重にもなる。

しかしその慎重に暗示をかけるべき少年を蹴り起こした。何せ、暗示をかける際は慎重にやるつもりだが暗示をかけるべき対象を慎重に扱つてやる義理はない。

「おおい。生きてっか？」

「…ぐッ、うう」

痛みで意識が朦朧としているのか、呻く少年を見下ろす。
1人だけ目覚めた少年は自分へと向けられた生暖かい微笑みに怯えた。

「ヒッ……！」

「ああ、悪いね。だがおまえらに同情の余地はないよな」

悪魔片鱗（後書き）

よつやひと我らが学級委員長遠坂さんの登場。

凛ちゃんは兄さんの事を何気に前から『氣にしてました。勿論恋愛的な意味は含まれません。将来的にどうなるか分かりませんが、』。

にしても、あいかわらず兄さんの興味を引く事が出来ない。あの凛すら撃沈した。

いや、待て！まだ、まだ兵はいるんだぜ……！

次回、桜が動き出す！？

高校受験が終わった中学3年最後の春。士郎もこの春から中学3年生に繰り上がる。

並みの人間なら少しばかり浮かれる学期の節目に、俺は校庭の片隅で憂鬱な溜息を吐いた。

目前では俺の心を『すかのように炎がゆらゆらと揺れる。

「こんなところで何やってんだよ」

士郎の同級生兼桜の兄たる間桐慎一が、俺の陰気な雰囲気に堪え難くなつたのか、唐突に訊ねてくる。

そのあいまも火柱がパチパチと迸つた。

「慎一じゃないか。つうかいたのか」

「いたよ。悪かったね、僕なんかで。あいかわらず弟しか眼中に無い奴だな。まあその弟に気づかない所を見ると重症みたいだけどさ」「夕兄、ホントにだいじょうぶか? やっぱり今日は休んだ方がよかつたんじゃないかな?」

我が弟の声が間近に聞こえ、目を見開く。

この俺とした事が、士郎に気づけない程の愚かな失態を演じてしまつたらしい。

「し、士郎ッ! すまない!!」

「俺の事はいいよ。それより夕兄、ふらふらじゃないか。最近寝て無かつたみたいだし、だいじょうぶなのか?」

「なんだよ、衛宮兄。そつだつたのか? たしかに凄い隈だな」

そんなに酷い顔をしていたのか、覗き込んでくる慎一が顔を顰めた。俺が問題ばかりおこすからか（主に喧嘩や他人の問題に巻き込まれる事もしばしばあった）士郎は随分と心配性に育ってしまった。今は心配事をかかえているのだから尚のこと。

「あー、まあな

頭が回らない。ただ燃え逝く手紙の行方を見つめつづける。無事に全てが燃え切らねば安心も出来ない。

慎一はおざなりな俺の返答に漸く異変に気づいたようだ。怪訝そうに首を傾げる。

「ていうか、わざわざから何燃やしてんのさ」

「呪いの手紙」

即断即答した。

それがしつくづくくる言い方だったのだ。誰が否定しようが関係ない。この手紙は所謂「呪いの手紙」だと名言する。

士郎は曖昧な表情を浮かべたが、暫し考えた結果その通りだと思つたのか同意し頷いた。

「ハア？」の燃やしてんのって、手紙だったのかよ。しかも呪いイ

？

慎一の目が明らかに胡乱げになる。

「俺もこうこう言つて方はしたくないけど、夕兄のいう事も間違つてないと思う」

「……いったい何があつたワケ？ 弟の方も分かつてゐみたいだし。何？ 僕だけのけ者？」

「いや、そういう訳じゃないんだ」

心無しか士郎が青冷めたように見える。
俺なんかより士郎の方が余程心配だ。

「おい。士郎こそ顔色が悪い。だいじょうぶか? だいたい、元々は士郎に送られてくる手紙なんだ。おまえも気をつけろよ?」

「…うん」

「ますます意味が分かんないよ。弟の方に送られる手紙のことで何でおまえの方が体調悪くなつてんだよ」

「ああ、実は……」

そもそも手紙が届くようになったのが1ヶ月前。

始めは悪戯かとも思っていたのだが、1週間づいたあたりで漸くこれが本物の俺にたいするストーカーからの手紙だと気がついた。

「ストーカー? ……「呪いの手紙」なんていうからには衛宮に恨みがある奴の仕業じゃないのかよ」

「いや。俺達も始めはそう思つたんだ。が、すぐに考えを改めた」「?」

訝しげな顔をする慎一の疑問に答えるべく、重い口を開いた。仕方ない。内容が内容なのだ。それに中学生の内からこんな被害に遭うなど思いもし無かつた。

まず、手紙の内容の殆どに俺と士郎の行動が綴られている事だ。授業以外では殆ど共に行動する事への抗議に始まり、士郎への悪口や反感めいた言葉までが3枚から5枚ぐらいに渡つて書かれた手紙が毎日送られてくる。

何より「呪いの手紙」と命名した理由は、クラスメイトの少女と俺の書いた隠し撮り写真が、少女の方の姿がズタズタにされたり、毎

回来る手紙に小型とはいえ「呪いの藁人形」が同封されていたからだ。そんな不気味な手紙を「呪いの手紙」といわず、なんといえようか。

「そんなかんじで、俺と士郎への2重の嫌がらせなんだ。俺達がこんなに疲れてる理由は分かつてもらえたか？」

「それは……なんというか、凄いな」

「いい迷惑だ」

「夕兄、そんな言い方…」

「純粹な好意なら俺も素直に喜んだが、これは悪意以外の何ものでもないんだ。よって、おまえが気に病む必要は何処にもない」

無論、俺がどれだけ辛辣な言葉を吐こうとも士郎が気にしてやる必要はない。実際、既に吐き捨てたようなものだが。自分でも目が据わった事を自覚する。

「そろそろお昼休み終わりますよ、先輩」

ふと少女の穏やかな声音が耳に心地良く通りぬける。

「桜か」

「こんにちわ、夕先輩。これ、すぐそこに落ちてましたよ。先輩のものですか？」

「ゲッ！」

桜が拾つたものを見て、頬を引きつらせた。

その手紙は所々が焦げていたものの、全て燃やし処分したつもりの悪夢の元凶。今だ原型を留めている命名「呪いの手紙」だった。

「先輩?どうかしたんですか?」

「あー、いや。なんでもないんだ、桜。」れは確かに俺のだな

ひっくり返った声を出したものだから桜が目を白黒させていた。

「おい。それが例の手紙か？」

「ああ。見るか？」

慎一はあんな事を聞いた後にも関わらず、好奇心が擦られるのか興味深々に手紙を観察する。

べつに読んだとこで面白くもなんともなく、気持ちが悪くなるだけだとおもうんだが。

案の定、好奇心に負けた慎一が受け取ったが、段々顔色が悪くなる。読む前から蒼白な顔するくらいなら読まない方がいいだろう。

可愛らしい便箋の跡形もない用紙に田を走らせるあたり、きちんと読んでいるらしい。

「い、これ……」

「なんだ、慎一。読んだなら時間もないし燃やすぞ。授業にも遅刻しちまう。士郎、行こうぜ」

「そうだな。慎一、だいじょうぶか？」

慎一の顔色が悪いのは自業自得だ。

まあその慎一がやけに火の中に放り込んだ手紙と桜を交互に見比べているのが気にはなつたが。

今は問い合わせる時間もない。慎一の事なんかで士郎を授業に遅れさせる訳にはいかないし、燃え尽きたら火を消す事も忘れないようにしなければいけない。

「桜もわざわざ呼びに来てくれてありがとう」

「いえ。お役にたてて嬉しいです」

大袈裟な桜に苦笑し、頭を撫でる。

その時、少女の桜色の艶やかな口唇が、妖しげな笑みを象った気がした。

恐慌春麗（後書き）

時間がいつきに飛びました。

さて、皆さんには黒桜に気がつきましたか？
ストーカーの正体は分かりますよね？

ヒントはワカメこと慎二君の態度。…やつは気づいたやいけない事
に気づいてしまったんですね。おかげで、やつは举动不審でしたよね

（笑）

兄やんは気づかない。
とりあえず兄やんは土郎が第1。

前世謡話（前書き）

兄やんの前世のお話。

バッドエンド的な話のため、注意ください。

前回に言つ忘れましたが改訂分の話が終わりました。

実は今回の話はいつか書こうと結構前から思つていた話です。やつと書きました。次回からは本編にいきたいと思います。

日々繰り返され、つづく日常の平和。

俺のこの17年間に不満がない訳じゃないが、特別物騒な事がおこつて欲しい訳でも無かつた。

自分が恵まれている事は自覚していたし、最近の悩みといつたら彼女と遊びに行く事が多くなつたせいか金欠気味な事くらいだ。むしろ、こんな事を不満に思える日常が幸せだったのだと今は分かる。友人とのたあいないかけ合いや喧嘩。授業中の雑音に混じる笑い声。待ち遠しいお昼ご飯や休み時間のチャイム。放課後の喧騒。

あの時、そんな些細な事を愛おしくかんじられたなら、今更後悔なんかしないに違いない。数時間前の出来事が走馬灯のようによみがえる。

もしかしたら、つい数秒前に交わした彼女との口づけの方が夢だったのかも知れない。否、この田の前の凄惨な惨状こそが夢なのか。それこそ俺の単なる願望に過ぎないのか。

「おい。見ろよ

「あん? んだよ、まだ全員殺してねえのかよ」

「いや。今帰つたみたいだな」

「運の悪い奴だ。面倒だが始末しとくか」

しかし、俺の願いも虚しく、侵入者たる見知らぬ男達2人は残酷な現実を突きつける。放心した俺を氣にも留めず。

もつとも、俺自身が壁に飛び散った血痕と死にかけの弟に目を奪われ、不穏な言葉の数々に構つてやれる余裕など無かつたが。

「ア、」

混乱からか、ぐぬぐぬとあぐぬ血液が逆流してしまつたのかと思つ

血縄まりの中の梯が懸命に伸ばす手が恐ろしい。

ドクッドクッと煩い心臓の騒音がやけに鮮明に聞こえる。今までかんじた事のない死の匂いに充満した馴染みのあるリビングが異空間のようだ。

全く機能を停止した様子の脳みそが、体は元より本能が、早く逃げろ」と訴えかける。

-

逃げなければ……。すぐにでも走り出さなければならぬ。

「兄さん！」

弟の掠れた声に反応した体びくんと跳ねる。

漸く動いた体が戦慄く。

エジと金身の汗が噴き出しだと思った時、氣付いたらその場から後退っていた。

動けずにいたのが嘘だつたかのように必死に駆け込んだ先は、玄関などでは無く階段。自らの失態に気づいたのは自室に飛び込んだ後だった。

「チツ。そんなとこに逃げても無駄だつつの」

「あまり長居したくはないんだがな。全く面倒な」としてくれた

男達が苛立たしげに舌打ちし、扉を蹴った。

1人は多少冷静なようだが乱暴なのはおなじ。その内蹴り破られるのも時間の問題だ。

俺は焦燥から乱れる呼吸を無視し、部屋を見回した。失態を犯してしまった事は今更嘆いたところで致し方ない。そんな事よりも何か此処から脱出す手段を探さなくてはならない。

「そうだ！け、携帯は…！」

こんな時こそ警察を頼るべきなんだ。思い至った俺は通学鞄を漁つた。

そのわずかな時間すら惜しい。

「あ、あつた！」

「警察に通報しても無駄だぜ。警察が駆けつけるまでにオレらがおまえを始末するからな！」

男達には扉越しの俺の行動は筒抜けらしい。

だが言われてみればその通りだ。他の脱出方法を考えた方がいくらか建設的なような気がする。俺は警察に通報するのは断念する事にした。

とはいっても、唯一の脱出経路たる扉は男達に塞がれ、手詰まりの状況だ。

「後は…窓しか、ないじゃないか……」

此処は2階。飛び降りた際に、下手をすれば死ぬ可能性とて有り得る。

だがこの場に留まつたとしても殺されるのを待つ事しか出来ない。どちらを選んでも死の危険性はある。

それに、いまだに息のあつた弟を置いて逃げる事が俺に出来るのか。両親の死は確認した訳じゃないが恐らく生きてはいまい。

わずかに残った理性やら本能やらは逃げた方がいいと焦きたてる。あの血臭の酷い室内と血を浴びたように赤い弟を思い出すと吐気がする。進んで戻りたいとは思わない。

「クソツ」

喚いたことでびりしきりもない。弟はあのまま死んだかもしないし、俺はこれから死ぬかもしない瀕死だ。考える暇なんかない。

「行動あるのみ、だ」

結論は始めから用意してあった。後は俺が覚悟を決めるだけだ。その間、男達は勢いをつけ、ドカドカと乱暴に扉を蹴りつける。

「つらあ！」

「ふん。手間を取らせやがって」

ついに盛大な騒音をたて、扉は壊された。

蹴破られた扉は無惨な姿だ。だがそんな事を気にかけるだけの余裕はない。

好機は今しかないのだ。

「 ッ」

騒がしい方の男が足を踏み入れるまえに男へと突進した。

思わぬ事態に不意をつかれた男は無様にも階段を転がり落ちた。幾分か冷静な方の男は仲間の男が気絶したのを確認する事もなく、俺

に拳銃を向けた。普段の俺だったら向けられた銃口に身動きすら出来無かつたに違いない。だが今のアドレナリン全開の俺は、持つていた椅子を投げつける事に成功した。

「このガキイ！」

激高した男が撃つた弾は見事外れ、窓硝子を撃ち抜いた。大量の汗はかいしているものの、俺は無傷だ。

流石にこの音を聞いたら誰かが通報くらいはしてくれる筈。男の方もこれには焦つたのか再び引き金を引こうとする。

最早その事に怯える余裕もなく。俺は停まらず男の懷に飛び込んだ。

「なッ！？」

そのまま頭突きを見舞つてやつた。思った以上に効果があつたのか、男が仰け反ると共に悶絶している。

隙だらけの男を先刻の氣絶した男同様、今回は自發的に階段に突き落とした。

行く先を遮る邪魔者はいなくなつた。今度こそ、俺が駆け下りる。

「――」

過度の恐怖から呼べ無かつた弟の名を漸く叫ぶ。

そう、俺の結論は出ていた。この俺が家族を、弟を見捨てる事など出来よう筈がないのだ。

けれど、時とは残酷なもの。決して、待つてはくれないもの。

「え…？なん、で？」

血塗られた赤い部屋に俺を除いた生者はいない。

虚しく響いた弦が俺の孤独をたしかなものにした。

前作闇話（後書き）

当初、出でつかと思っていた兄やんの前世のなまえは桐生蒼士^{キリコウアオシ}。弟が尚哉。

るろ剣の蒼士様がスキだつたんで。

弟のなまえはなんとなく浮かんだだけ。

すいませんメチャクチャ蛇足でしたね。

その日の俺は終始何をするにも上の空だった。

無論。左手の甲に刻まれた聖痕の事を考え込んでいたからだ。
たしかに、近々冬木市の「聖杯戦争」が始まるのだから、原作知識のある自分がその事自体に今更驚くことはしない。しかし、それも「知識」に含まれない事態がおこればべつだ。実際、この世界にいない筈の俺に令呪が刻まれた事が異常。だが不足の事態がおこる可能性は始めからあつた事だ。

そのため、急いで士郎の令呪を確認した結果、士郎の右手の甲に刻まれていた。あんな戦争に参加するための資格など刻まれない方が士郎のためにもよかつたんだが。

今更悔やんでも仕方のない事だ。それに自分の異質性を鑑みれば、俺自身に影響が出たとこで不思議じゃ無かつた。

そんな懸案事項をかかえた俺のまえに1人の少女が現れた。

「なあ、イリヤスフイールよ。何故、手を繋ぐ必要があるんだ？」

少女の名はイリヤスフイール・フォン・アインツベルン。

その少女に握られた柔らかな手を胡乱げに見つめる。

「ムー、お兄ちゃんが送ってくれるって言ったんじゃない。^{レディ}淑女のエスコートくらい出来ないとモテないわよ」

不満を露わにするイリヤが頬を膨らませる。

始めこそ、少女が学校の校門にいた事に違和感をかんじたが、柳洞が近くにいた手前見た目幼女を追い返す訳にもいかず。しかも彼女は俺達兄弟の最後の家族だ。無碍にも出来ない。

何より、士郎の用事を変わりに頼まれ、遅くまで居残つたせいが日

も暮れていたのだ。傍にバーサーカーがいるのかは分からぬ。 1
人かもしない彼女を送るのは当然のことだ。

これがあの殺しても襲われても平氣だらう桜だつたらべつの話だが。

「…それとこれとは関係ないと思つんだが。まあいいか。それより君は何の目的でいらしたんですかね。お嬢さん」

「ふふ、わたしのことはイリヤでいいよ。今日はお兄ちゃん達に忠告しに来たんだ。早く喚び出さないと死んじゃうよつて」

「それはわざわざご苦労様なことで。まだ開始の合図すらないにつづのにやる気満々だな、イリヤは」

ある程度、予想はしていたが、若干呆れ氣味に肩を竦める。まあ實際、唐突すぎる言葉にめげる訳にもいかないのだ。

順応するしかあるまい。

「でもそれだけじゃないわ。お兄ちゃんには興味があつたの」

「俺に?」

「そうだよ。だって、お兄ちゃんは8人目のマスターなんだもん」

青みがかつた蒼黒の目を見開いた。その双眸でイリヤを凝視する。だがよくよく考えれば納得出来る事だ。「聖杯の器」たるイリヤが知つている事が当然なのかもしれない。彼女が俺に興味を持つ事も十分考えられることだ。

彼女の言葉で俺の扱いは何処までも異物にたいするものらしい事も判明した。しかも、イリヤのこの原作を逸れた行動以前に認めたくない事実だが、桜や慎一の性格が多少捻れたのも俺のせいかもしれない。

「8人目、ねえ」

「あんまり驚かないんだね。つまんない」

「つまんなくて結構」

「わたしは驚いたわ。もう7人揃つていた筈のマスターに、突然8人目が現れるんだもの」

夜道を照らした月の光が無邪気にハシャゲイリヤの白銀の髪を輝かせる。その浮世離れした姿は西洋の妖精を思い浮かばせる程、幻想的だ。

この見た目以上に幼さをかんじさせる少女が、俺や士郎より年上だとはいまだ信じられない。

しかし、幼い少女から簡単にあたえられた情報には皮肉げに笑った。その気安さは絶対的な自信をかんじさせたのだ。

「君は俺なんかが8人目で期待外れだったんじゃないのか？」

「そんなことないよ。お兄ちゃんを選んだのは聖杯だもん。つまりお兄ちゃんにはそれだけ強い願いがあつたってことでしょう？」

「願いか。あるにはあるがな…」

「もしかして、嬉しくないの？」

正直嬉しくはない。

むしろ士郎を巻き込んだ元凶に恨みすらある。イリヤの場合、自分の生まれた理由たる聖杯を盲目視する傾向があるみたいだが。まあある意味、当然の事か。

考えてみれば、アイツベルンの聖杯たる少女が最大の犠牲者。本人は無自覚かもしぬないが、今のイリヤの存在意義の象徴は聖杯だ。だから彼女は聖杯に身を捧げる事に疑問を持たない。
血が繋がっていないとはいえ姉の殉教者のような思考に苦々しくなるばかりだ。

「いや、好都合といえば好都合だね。士郎を守りやすい。しつかし、君もわざわざ敵に会いに来るなんて物好きなんだな」

「モノズキ？面白い事いうんだね、お兄ちゃん。サーヴァントもつ
れてないくせに」

くすくすと愉快げな笑い声が暗い路地に響く。
そんな笑みの中に明確な自負がうかがえる。イリヤは自分の勝利を
信じて疑いすらしないらしい。

「そりゃやうだな。ま、忠告には感謝するよ、イリヤ」

イリヤの美しい銀髪を優しく撫でる。

その事に驚いたのか紅い双眸を見開いた。

「えへへ。どういたしまして」

撫でられたのがそんなに嬉しかったのか、礼を言つたイリヤが雪の
ように白い頬を淡く染めた。

そのあまりにも愛らしい姿には込み上げるものがあった。だからつ
い口をついて出でてしまった。

「なあ、俺がいえたことじやないが……君は本当にこのまま聖杯戦
争に参加する気なのか？」

「今更どうしたの、お兄ちゃん？」

「いや、な。君みたいな優しい子がこんな茶番で命捨てていいいもん
なのかつて思つてね」

言つてしまつてから後悔した。途端にイリヤの雰囲気が冷たくなつ
たのが分かつたからだ。繋がれた手も離れ、既に後悔しても遅い。
其処には先程までの無邪気な少女の姿は無く。血の臭いを纏わせた
魔術師の姿があった。

まあ気分を悪くするのは当然だ。彼女は俺が茶番だと言つた戦争に

身を捧げるのだから。

「……わたしがなんなのか、知ってるんだね。でもダメだよ。次に会つたらわたしはお兄ちゃんを殺すんだから。それまで死なないでね。バイバイ、お兄ちゃん」

俺はそれに応えず。

闇に紛れ去る頑なな少女の背を見えなくなるまで茫然と見送った。

異端痕跡（後書き）

イリヤルート難しそうだなあ…。

でもついに兄やんが士郎以外に興味を示しました。
まあ兄やんは家族にとことん甘いんで。とはいえ士郎以上になる事
は誰にも無理だらうな。

間桐兄妹は次回出ると思います。

日常分岐（前書き）

桜がオリキヤラ化してます。扱いも凄く悪いです。
桜ファンの人には不快な想いをさせてしまうかもしません。
くれぐれもご注意ください。

日常分岐

俺の間桐桜への認識はあくまでも、妹以下の少女にたいするものだつた。それは単なる友人の枠に過ぎない存在。酷い言い方かもしれないが、実際正しい言い方なのだから仕方ない。

ただ、俺は士郎が大事にするものだつたら、たとえ俺の嫌いな人間だつた場合でもなるべく大事にするし、しようと努力する。だから士郎が年下の桜の事を妹同然に可愛がるのを相応に扱つた。だがその扱いが、桜の雰囲気をかえた原因の一つなのかもしない。

「夕先輩、今日こそ私といつしょに帰つてくれますよね？」

「慎一の奴と帰ればいいだろうが」

「その言葉は聞き飽きました。もうそんな言葉では誤魔化されませんからね」

「あつそ。んじゃハツキリいわせてもらおうか。俺はおまえと帰りたくねえんだよ。分かつたらテメエ一人でとつとと帰れよ」

そんな風に、変わつた桜のあまりのしつこさに苛立ちを隠せない。だからかつい普段以上の辛辣な言葉を浴びせてしまつた。桜がこんな風になつた原因も俺が多大に影響を及ぼした結果だつたし、ストーリング紛いの事をした時にもここまで辛辣に言つた事はあまり無かつたが。

この2月2日の今回ばかりは桜につき合つてゐる暇はない。それ程、重要な日だ。

「あれ？ 今日の先輩はなんだかいつもと違いますね。ぞくぞくしてきました」

「…マジ早く死んでくれないかなあ」

遠い田をした俺がつぶやいた。

桜に遠慮など必要のない事だつたのだ。

「もしかして士郎先輩と帰るんですか？」

「おまえには関係ねえだろ。つつか着いてくんなよ」

士郎を迎えて行く道中を桜が追い縋る。これは流石の俺も鬱陶しい。しかもいつも以上にしつこい。これでも桜が何かに気づいたんじやないのかと気が気じゃない。

「おまえしか頼める奴いないんだよ、衛門。この僕が頼み事してやつてんだから、ここは頼まれるもんじゃないの？」

「ううん。俺はべつに構わないんだけど。でも今日は夕兄と帰る約束したからな……」

士郎の教室に迎えに行つたら既に廊下へと出でている士郎と慎一がいた。

何やら慎一が士郎に手を合わせ、頼みごとをしているようだ。原作同様に女子を何人も連れ歩いている。しかも頼み事している慎一の方が上から目線だ。原作の間桐慎一よりはまだだが、やはり高慢なところは変わらない。

たいする士郎はそんな態度の慎一に怒った様子は全く見られない。不本意極まりないが長いつき合つだから当然か。

「フン、そんなの断るか待たせるかすればいいじゃないか。僕は衛宮達みたいに暑苦しく男兄弟で帰るんじゃないんだよ。女性達を待たせてるんだからね」

困ったように言葉を濁す士郎へと吐かれる慎一の傲慢な物言いに俺も怒りより呆れが勝つた。

だが困つてゐる士郎を黙つたまま見ている訳にもいがず、慎一の肩を掴んだ。

「よお色男。暑苦しい男つつの俺の事かな
「ひツ！タ士！…」

振り返つた慎一の顔が青くなつた。
まあ慎一の場合、士郎の事が絡んだ時の俺の怒り狂つた姿を想像したせいかもしれないが。

「夕兄……」

「慎一君よ。人の弟をパシリに遣おつとした拳句その言ごくさは何なんだ？」

「あ……いや、その、まあなんだ。…とりあえず冷静に話しあおつじやないか、衛宮先輩」

「俺は至つて冷静なつもりなんだがな」

苦笑する俺が怒つていないので分かつてもられたのか慎一が漸く安堵の息を吐いた。

「ねえ、先輩。士郎先輩は用事が出来たみたいですし、今日は諦めて私とかえりましょう」

「……おまえが諦めるという選択肢はないのか」

「なあ夕兄、この際だから一度くらい桜と帰つてやつてもいいんじやないのか？」

士郎は桜に甘い。今みたいに桜を庇うような事を度々いう事がある。だがいくら士郎の言葉でも従いたくないことはある。士郎には桜が健気に見えるらしいが、勘違いも甚だしい。実際は計算高いし図々しいし鬱陶しい女なのだから。

俺が何より許せないのはそんな優しい士郎を桜が仇敵の如く睨みつけている時がある事だ。

呆れて溜息を吐いた。

「このままじゃ埒があかねえし、この際俺がやつとくからおまえらは先に帰れ」

「え……なんでそんな事になるんだ？頼まれたのは俺なんだから俺がやるよ。だいたい夕兄、何を頼まれたのか分かつてるのか？」

「ああ、弓道場の片づけだろ？」

「で、でもなにも部外者の先輩がすることないじゃないですか！」

「そんなこと言つたら士郎も今や部外者だろ」

常に無い程の意識した優しい俺の声音に桜の整つた顔が歪んだ。

以前はたしかに弓道部員だったが、士郎が怪我で退部した為に俺も部活を辞めた。桜があくまでも俺を部外者よばわりするなら士郎も部外者だ。

そんな俺に最早説得は無駄だと気づいたのか桜が慎一を見みつける。

「な、なんか夕士がやつてくれるみたいな話になつてるんだね。でもやつぱり僕が自分でやつた方がいいかもしないよね。はは、あはははは」

その視線に過剰に反応する慎一。

これには慎一も身の危険をかんじたのか、乾いた笑いを漏らす。

「いいくつて、いいくつて。俺に任してくれ。後ろの彼女さん達をお待たせする訳にもいかないしな」

「先輩が残るんなら私も残ります。私は弓道部員ですから」

「いや、桜は士郎と帰れよ。俺は送らないぞ。でも女の子が夜道を歩くのが心配なら士郎が送つてやれ。な？」

「 「…………」 」

俺のあから様な拒絶の言葉に士郎が気まずげに桜の方をうかがう。慎一にも口を挟む隙をあたえず、桜を諦めさせるための口実を遺憾なく発揮させてもらつた。

桜は忌々しげに兄を睨みつけ、唇を噛みしめた。帰宅後に慎一が桜の嫌がらせを受けるだらう事は想像に難くない。

簡単に想像出来る未来に現在少女達に囮まれたリア充慎一はただ愕然とするのだった。

敵前逃亡（前書き）

駄文の駄文。

兎にも角にも駄文。文才が欲しい。

前回以上にヤバいです。

兄やんがテレる。キモイかも。

敵前逃亡

荒々しい息が日の暮れた暗い廊下に響く。校舎の中を逃げ回った拳銃、全力疾走したにもかかわらず、今の俺は正に絶体絶命の淵。目の前に聳え立つはコンクリートの壁だけ。全身汗だくの体で振り返れば、「士郎の死」を回避する代わりに俺がランサーに追い詰められる結末。

結果、そのまま槍が胸を抉られる筈だった（・・・）。

「坊主、オマエ何もんだ？」

「……ツ」

無言のまま田だけは離さない。

まあつい今し方殺されかけた相手なんだから当然の事だが。流石にサーヴァントの槍を完全に避けきる事は出来ず、左腕を掠つたらしい。

あやうく本当に心臓を貫かれ、死ぬところだった。相手は喋る余裕さえあるが、当の俺は極度の緊張状態のせいか呼吸が乱れ始めた。実際に今も俺が気を抜けば、死んだ事すら気づかせずに俺を殺せる筈だ。

それだけ俺との英靈の間には圧倒的な差がある。

「まあなんにせよ、少しは楽しめそうじゃねえか」

「」

冗談じゃない。誰が遊ばれてなんかやるものか。

だいたい、何の策も無く追い詰められる程、俺は馬鹿じゃない。わざわざ追い詰められたのにも理由がある。常備している単なるペーパーナイフに強化の魔術をかけたのもそのためだ。

「ん……魔力を感じる。成る程。オマエ、魔術師か。ま、魔術師だろうが見られたからには殺せつてのが命令なんでな。悪いな、坊主。死んでくれや」

無造作に心臓を貫こうとしただけだったランサーが槍をかまえた。今度は先刻と違い俺への悔りはない。今度こそ確實に殺されるのが分かる（・・・）。なまじ人間の域での実力があるからこそ分かるのだ。

「やだね」

だが次におこるだろう事を想像し、愉しげな笑みを浮かべた俺は床にナイフを突き刺す。

見た目には何の変哲もないナイフは意外な程すんなり床に突き立つた。

「な、にを……つて、ハアアアツ！？」

瞬間、床に亀裂が入り、簡単に崩れてゆく。

後はただ、ランサーが何がおきたのかも理解出来ずに絶叫を上げた。まあ客観視したら有り得ない光景なんだから仕方ないんだが。勿論この学校の床がやわな造りだった訳じゃない。「死の点」を突いただけだ。

「やベツ、と！」

こうなる事を分かつていていた俺まで落卜するよつた愚を犯す訳も無く、窓枠に手をかける。まさか崩落する廊下を悠長に見届ける余裕などある筈もない。俺は

壁づたいに降りるために窓から身を乗り出す。

その最中、垣間見た赤い男が驚愕の表情で俺を凝視していた事に気がついた。

「誰だ、貴様ツ！」

男は俺を詰め寄らんばかりの形相だった。だが俺に説明している猶予などあろう筈もない。

仕方なく軽く手を振つておくだけに留めた。男はまだ何事か言いたげだったが、駆けつけた遠坂を抱える事を優先した。

俺も跳躍して学校から出る。

「にしてもあれがシロウ（アーチャー）か。未来の士郎だけあっていい男に成長したもんだ。まあ士郎だから当然だよな」

へにやへにやと弟の未来の雄姿に頬を緩めるも気は抜かない。

夜の路上を逃走する中ランサーが追つて来たか気配を探る。暫くは平氣かもしけないが、原作より早く追いつかれる可能性が高い。その上彼はたしか最速の英雄だった筈。そんな訳だから、当然足に魔力を集中的に込めるのを忘れない。

しかし、信じられない人物を目に留め、その足に急ブレーキをかける。

「え、夕兄！？その怪我どうしたんだ！？」

「し、士郎！？お、おまつ、なんでこんなとこにいんだよ！？」

「なんでって…。夕兄は遅いし、元々俺が頼まれた事だったから、手伝える事があつたら手伝おうかと思つたんだけど」

全速力で走ったおかげで相当息の乱れた俺に目を丸くする士郎。槍を掠つた腕の方の服にも見るからに痛々しい血が滲んでいる。

何故家にいないと怒鳴つてやりたいが、士郎の性格を考えれば予想出来ない事じや無かつた。この事に関して俺は糾弾出来る立場に無い。

「そんなに急いで何があつたんだ？」

「説明は後だ。来い」

「ちょ、夕兄ッ！」

「いいから走れ！！」

こんな道端で長話をする時間はない。焦れた俺は有無を言わせず腕を掴んだ。

兎に角、今は士郎にセイバーを喚ばせる事だけ考えればいい。俺の召喚は後回し。原作と異なる展開故に何がおこるか分からず。慎重に成らざるを得ない事が痛い。

士郎も俺の必死な様子に戸惑いつつも頷いた。屋敷までも田前。

「なあ、ホントに何があつたんだよ。それにその腕の怪我もだいじょうぶなのか？」

庭先まで來ると力が抜けたのか士郎が漸くと言つた様子で質問する。

「俺は問題ない。とりあえず話は土蔵に行つてから……」

「全くしてやられたぜ」

ゾクリ。

俺の言葉を遮つた声が背筋を凍らせた。それは侵入者用の結界の警鐘が鳴るのと殆ど同時。士郎もこの鋭い空氣にあてられたのか息を詰める。

バツと振り返れば、わずか10メートル先に槍兵のサーヴァントがいた。

「だが逃走劇もここまでだ。次もおなじ手はくわねえ。今度こそ観念してもらおうか」

「ハツ、冗談！」

「へ？」

強がりの言葉と共に断り無く士郎を担いだ俺の奇行に士郎が混乱し、ランサーが身構える。

たしかに今の彼に2度おなじ手が通用するとは思わない。俺がおなじ手をつかう訳もない。それにあまり魔眼を多用すれば、脳に不可がかかる。

だから、ただ単純にそのまま士郎を土蔵の中に放り投げただけ。

「えええ！？」

「チイ、何がしてえんだテメエは」

苛立つたランサーが突進する。それに併せて俺も後ろに飛び退く。だが追随するランサーと一緒に内に距離が縮まる。

突き出された槍に対抗すべく少しでもナイフでの回避を試みるが、易々と弾かれた。

「 ツ

反動で腕が痺れる。だが堪えなければ殺される。

崩れた態勢を整えるために身体を捻る。追撃の槍が飛んでくるのかと思つたら、意外な事に回し蹴りを喰らつた。

吹つ飛ぶとまではいかずとも、蹴り転がされた場所は冷たいコンクリートの感触がする事からかなり飛んだらしい事が分かる。

「夕兄！だいじょぶなのか！？いったい何がどうなつてんだよ！」

！」

「ぐッ」

「魔術師にしては中々だつたが……。ま、相手が悪かつたな。大人しくそつちの坊主共々死ね」

「い やだつつつてんだろうが！」

「何！？」

いつ土蔵の中に突っ込んだのか、気がつけば隣には俺を揺さぶる士郎がいた。恐らく、今俺が殺されれば士郎も殺される。そのかんがえが浮かんだ途端、腹の奥底が焦げつく程の怒りが溢れ出るのが分かつた。

そんな事をさせてなるものかと強く強く思つた意志が、反映したかのように土蔵の中が目映い光でつつまれた。

思つた通り、溢れ出る光が収束した召喚陣の上には彼女がいた。彼女が呼び出された切欠は、おそらく士郎の中の聖遺物と俺の血だと思われる。

だがここに来て漸く異常事態に気がづいた。露わになつた凜々しき騎士王が、いつまでも契約の言葉を口にしないのだ。
まあこんな事態じや困惑するのも無理はない。

「あー、君を召喚したのは俺と其処にいる俺の弟だ。マスターは俺達2人だよ」

つまり今回の場合、士郎の中身が触媒で、召喚に必要な血液が俺のものだつたせいか、結果的に召喚者が2人と認識されたのだ。だがそのことは俺からしたら好都合な事この上ない。

おなじサーヴァントのマスターだから士郎が無茶しようものなら口出しも出来るからだ。たとえ違つたとしても口出しあしたかもしないが、その方が忠告やらしやすいのはたしかだ。

「マスターが2人……ですか。そのような前例など聞いた事がありますが。たしかにラインは貴方がた2人に繋がっていますね。いいでしょ。貴方がたをマスターと認めます」

「ああ。じゃ、早速ですまないがあのサーヴァントを追い払ってくれ」

「了解しました。これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに、契約は完了した」

今度こそ正式に契約を結んだ少女が早々と土蔵の外へ飛び出す。
すんなり了承した少女に違和感はあつたが、目を白黒するしかない

士郎の方が心配だ。

それも士郎は俺が介入したおかげで原作の士郎以上に現状を把握出来ぬままなのだ。いきなり戦いの渦中へ放り込まれたともなればこの反応も致し方ない。

「ア、おいーやめ　！？」

人外の男を追つた少女の身を案じた士郎もその後を追つた。戸惑い通しの割に他人を心配するだけは忘れないらしい。人の生来とは中々ぬけないものなのか。そんな士郎に呆れつつ俺も庭の方に出た。

少女の見た目が見た目故に心配するのも分からぬ訳じゃないが。士郎の異常なまでの献身ぶりを再確認した気がする。

べつに善意自体を否定したい訳じゃない。

要するに、誰もが助けを求めている訳じゃないんだから無闇に手を差し伸べるのは如何なものかと言いたいんだ。そんなものは最早善意じゃない。単なる自己満足の押しつけに過ぎないものなんだから。

「な　」

案の定、士郎は土蔵の外で行われる戦闘に言葉を失った。

それもその筈。少女は助けなど必要ない程の圧倒的な戦いぶりを見せていく。むしろ今この戦いに介入する事は無粋にしかならず。足手纏いの邪魔者にしかなり得ない。

勿論俺もその迫力に呑まれかけた。だが幸か不幸か2度もその脅威に晒された俺は辛うじて堪えられる。

当然だ。士郎を護るためにも俺が怖じ気づいてはいられない。

「これが英雄か」^{サーゴアント}

「サー・ヴァント？……なあ夕兄、そろそろ教えてくれないか。」^{ヒー}

ちは何がなんだか分からんんだぞ」

やはり気になるのか士郎が再び訊ねる。

まあいい加減少しくらい説明せねばなるまい。流石にいまだ戦闘中のサーヴァントたちからは田を離す訳にいかないが。

「つまりおまえは巻き込まれたんだよ。聖杯を巡る魔術師同士の殺し合い 聖杯戦争に」

「聖杯戦争？」

「ああ、ほれ今日にしてんだろ」

「」

士郎がギクリと肩を強張らせる。

人間はどんなに信じ難いことでも田の前に突きつけられたら否定し難くなるものだ。アレ（サーヴァント）らの存在だけは否定出来まい。

それに異常な感知能力に優れた士郎なら本能的に感じられる筈だ。カレラが如何なる存在なのか。

「まあもう薄々分かっていると思うが、彼女を召喚したのが俺たちだ。つまり契約を交わした以上、俺たちが彼女の主人^{マスター}な訳だな」

「さつきの契約ってそういう……！？いや、待て！！夕兄ツ、そんな大事なこと一人で勝手に決めたのかよ！！」

「仕様がねえじやん。俺もホントはおまえを関わらせたくないなんか無かつたんだよ。でもマスターに選ばれたからやむを得ずだな……」

「マスター」

最終的に俺の説明に唸り始める士郎の言葉は少女の凜とした呼び声に遮られる。

今までのサーヴァントたちの会話を聞かせてもらつた限りでは、原

作同様ランサーが停戦を申し入れたらしい。俺も膠着状態の力レラの様子には気づいていたが、血気盛んな彼女が聞き入れるとは思わず。

彼女から声をかけられた事には驚いた。

「停戦を受け入れるかは貴方がたの判断に従います」

「俺はべつにいいが。士郎は構わないか？」

「いや、俺は状況がよく分かんないし、夕兄がいいならべつにいいよ」

「話の分かるマスターで助かるぜ。おい坊主、名は？」

「衛富夕士だ」

「そうか。じゃあな、セイバー。次はその心臓貰い受けるぜ」

彼女が俺たちに意見を求めたことにも驚いたが、結果的に止めずにすんだみたいだ。それに、だんだん彼女の違和感が目立ち始めた。少なくともこの少女は原作の彼女じやない。べつのルートを経験した彼女が、或いは平行世界の彼女なのかも知れない。

「よ、ご苦労様。君は剣士でいいんだよな？」

「はい。この身はセイバーのサーヴァントとして現界しています」

「俺の事は夕士と呼んでくれ。こつちは弟の士郎だ。2人共マスターだと呼び難いだろ」

「え、衛富士郎だ。よろしく。おまえはセイバーでいいのか？」

「分かりました、コウシ。シロウ、詳しい話は後程おねがいします。今は敵を迎え撃ちます」

「敵つて……」

セイバーが屋敷の方を睨みつける。

その言葉を受けたからか開けられたままの門の前に人影が現れた。

警戒心を露わにするセイバーが戦闘態勢に入るのを俺が制する。

「だいじょうぶ。知り合いだよ、セイバー。敵意があれば結界が反応する筈だ」

「こんばんは、衛宮先輩。私はこのまま戦つてもよかつたんだけど。この状況の説明くらいはしてくださいのかしら?」

現れた人影の少女の姿が月明かりに曝される。
だからこそ遠坂凜の微笑みが、凄まじい怒気を孕んでいる事に気がついてしまった。

遠坂の反応があんまりにも剣呑だつた為、殺し合いを覚悟すべきかと思つた程の凄絶な笑みを浮かべられたが、彼女も何も知らぬ素人同然の士郎に戦いを挑む程外道じや無かつたらしい。

事情を話たら今回だけは見逃す事を約束してくれた。しかも、敵の情報を知る為だつたのかもしないが、士郎に聖杯戦争の説明までしてくれたのだから、遠坂もたいがい甘い。

まあ実のとこ、俺の最大の懸念はこのまま原作同様に言峰綺礼に会に行く事だつたんだが。勿論、士郎の無知ぶりに呆れつつも視線だけで俺を攻めてくる遠坂が、士郎をそのまま放置する筈もない。結果的に、気づいたら教会へ行く事が決定していた訳だ。

しかし俺も諦める訳にいがず、教会に到着するギリギリまで反論をつづけた。

「遠坂の説明だけで十分じゃないか」

「仕方ないじやない。貴方の弟さん、全く事の重大さが分かつていいみたいなんだもの。教会には聖杯戦争に詳しい奴がいるわ。それに衛宮君は聖杯戦争の理由について知りたいんでしょ？」

「それはまあ……」

「いいから士郎は黙つていろ。だいたい、そんなの俺が教えればいい。わざわざ奴のとこに行く必要なんかないね」

「あら、先輩は綺礼と知り合いだつたのね。じゃあ衛宮君も？」

遠坂が刺々しい様子で問いかける。

この調子だと、やはり言峰からは何も聞かされていないようだ。事実上、この街を管理している遠坂に俺たちの事を黙つていた言峰に怒るのも無理はない。

「俺はあの教会が孤児院だつた事くらいしか知らないぞ。むしろ兄があそここの神父さんと知り合いだつたなんて初耳だ」

「ふうん。貴方の弟への溺愛ぶりは学園でも結構有名だけど……。

「魔術の事といい、意外に隠し事がおおいのね」

「人聞き悪い事いうなよ。言峰の事なら訊かれてたら答えたさ。魔術については、極力士郎を危険な世界から遠避けておきたかつただけだ」

「そう……」

心当たりがあつたのか遠坂はそれ以上問い合わせる事はしない。まあ彼女にも妹がいるから人事でもないからかもしれない。その後は教会が見えるまで沈黙が破られるることは無かつた。

「うわ、凄いな」

沈黙を破つたのは士郎の感歎の声だ。

高台の教会は雰囲気のある如何にも本格的な建物だつたのだ。この反応も仕方ない。

以前訪れた事のある俺もこの教会の雰囲気には慣れないのだし。

「マスター、私はここで警戒にあたります」

「分かった。そんじゃ後はよろしく」

「い、いきなり出でてくるなよ。結構心臓に悪いぞ、それ」

突然実体化したセイバーが用件だけ告げる。

士郎はいまだにこのいきなり虚空から現れる原理に慣れないらしい。俺も始めは彼女が（・・・）靈体化出来る事実には驚いたが、この行為自体に差程驚きはない。おそらくこの辺も原作の彼女と違うんだろうぐらいの認識だ。

俺たちはその足で礼拝堂に踏み入れた。

「なあ夕兄。そういうここの神父さんっていうのはどんな人なんだ。
知り合いなんだろ?」

「知り合いつつう程でもないけどな。だが奴の事はひと言じや語れ

ないな。ま、かなり腐った根性している事だけはたしかだぜ」

「そうね。10年来の知人になる私でもいまだにアイツの性格は掴
めないもの」

「10年来の知人? それはまた、随分と年季が入った関係だな。も
しかして親戚か何かか?」

「いや、あの野郎が遠坂の親父に弟子入りしてたつづく話だし、そ
の関係じゃないか?」

「よく知っているわね。正確にいうとアイツは私の後見人よ。兄弟
子にして第2の弟子つてとこね」

おもえば遠坂も氣の毒な少女だ。

自分の父親を殺した男が兄弟子の上に、ゆいといつ血の繋がった妹の
幸福の願いも叶わず。

そんな真実を知る事もないんだから。

「へえ。にしてもこここの神父さん……えーっと言峰とかいう人はこ
つち側の人だつたのか」

「ええ。聖杯戦争の監督役に派遣されたんだもの、バリバリの代行
者よ。名前は言峰綺礼。もう10年以上顔を合わせてる腐れ縁ね。
……ま、出来れば知り合いたく無かつたけど」

あの男の人格をある程度知れば当然の発言だ。

むしろ俺は10年もあんな男なんかとつき合えた遠坂を尊敬する。

「同感だ。私も師を敬わぬ弟子など持ちたく無かつた」

突然沸いた男の声。

祭壇の裏側から現れたその男が言峰綺礼だつた。

「再三の呼び出しにも応じず誰を連れて来たのかと思つたが。……
フム。彼らのうちの1人が7人目という訳か、凛」

「それが今回かなり特殊みたいでこの兄弟2人ともマスターなのよ。
片方はてんで素人だから見てられなくつて。ついでにアンタたちの
ルールに従つてマスター登録もしてあげる」

「それは結構。なる程、では彼らには感謝しなくてはな」

真っ直ぐ俺に向けられる視線が鬱陶しい。

こんな風にこの男が嬉しそうな顔をする事を分かつていてから來た
く無かつたのだ。

俺は憎々しげに顔を歪める。

「チツ」

「やはり選ばれたか、衛宮夕士。兄弟がいたことには驚いたが私は
君たちを歓迎しよう」

自分のサーヴァントに士郎を殺させようとした言峰がよくもぬけぬ
けと言えるものだ。ランサーを介し俺たちの行動も筒抜けだつた筈
にも関わらずこの飄々とした態度。

この腐つた世界で死んだ方が世のためなんじゃないかと思わせる男
などこの男だけに違いない。

言峰の言葉に殺氣立つ俺を遠坂が訝しみ、士郎も俺の殺気に身体を
強張らせた。忌々しい事だが、ここで何を言つても仕方がないので
ひとまず殺氣を収める。

やはり俺はこの男、言峰綺礼が大嫌いだ。

まあ尤も、この男の本性を知つた上でこの男を好きになる人間がい
るとも思えないが。

「ハツ、予言が当たつて嬉しいかよ。クソ神父」
「くくっ、予言とは上手い事をいう。しかしおまえは気に入らない
ようだが？」
「……」

俺が嫌悪に満ちた視線を向けても言峰の愉悦の笑みが深まるだけ。
だが嫌悪せずにいられないのもこの男から感じられる性質故だ。

「貴様が今この瞬間、敵じゃない事がこれ程悔やまれるとはな
俺は敵である事を知っているからこそ最大限の皮肉を込めてつぶや
いた。

最凶従者（前書き）

気づけば1ヶ月。お待ちたせしました。漸く最新話更新です。
早速お知らせしたい事があります。

今まで何度か指摘されました魔剣設定。このいい加減な設定を今回を境に切り捨てる事にしました。

よくよく考えれば、魔眼だけでも十分話は進められますし、十分チートですよね。その事を踏まえ、魔剣設定を使った2話程を修正しましたが、特に読み返す必要はないと思います。

それではこれからもよろしくお願いします。

最凶従者

俺たちがアインツベルンのマスターことイリヤの襲撃に遭つたのは、言峰による聖杯戦争の説明を受けた後だつた。

イリヤのサーヴァントは原作同様バーサーカー。今はセイバーが俺たちの安全を確保する為に教会近くの墓地へと誘導している。イリヤを説得しようにもそんな余裕もない。それ以前に最強の従者と自負するバーサーカーを従えるイリヤが、わざわざ説得に応じる筈がない。

「アハツ、無駄だよ。わたしのバーサーカーは最強なんだもの。どんな場所にかえようと意味なんてないんだから」

たしかに。原作を知つてゐる俺でも対峙した彼の英雄の桁違いの威圧感に顔を顰める程だ。

バーサーカーは文字通り「最強」の英靈。無論。充分承知している俺が逃げずに、この戦いの渦中に残つた事にも理由がある。俺が意味もなく士郎を危険に晒す筈がない。

状況が状況だけに逃げる訳にはいかないので。俺たちの居場所は少なくとも言峰にはバレている。仮に今サーヴァントを連れずに逃げ出しどもした場合、その滑降の状況下を狙われない敵がいる訳がない。あっさり殺されてしまうのがオチ。

つまりこの場にいるよりも更に死亡率が上れる事になる訳だ。

「ま、なんにしろ俺たちが出る幕はないな

ぶつかる斧剣と不可視の剣。拮抗する剣戟。次々に破壊され、吹き飛ぶ墓石と抉れる大地。

いまの俺たちに出来る事と言つたら、凄まじい戦いの余波に巻き込

まれないよう気につけている事くらいだ。

「！」

戦況的にも地の理を生かしている彼女が有利。

容易く凧扱われる墓石や木々を見れば、バーサーカーの凄まじさは分かるかもしだれないが、その力は生かしきれなければ意味はない。せいぜい俺たちは逆に彼女の邪魔をしないように務める事だ。しかし実際に危険が迫った時に咄嗟に動けるかは別の話。

遠坂が飛んでくる墓石の欠片を避けられずに固まってしまった。

「遠坂、危ないッ！！」

「あ？」

その様子を見かねた士郎が本来なら大怪我を負っていた筈の遠坂を士郎が抱き込んだ。
この行動に慌てたのは他ならぬ俺だった。

「おいおい気をつけろよ、遠坂！！士郎、怪我はないか！？」
「俺は問題ないよ。それより遠坂はだいじょぶなのか？」
「私はあんたのおかげでなんどもないけど……」
「そうか。よかつた。俺も役に立つだろ？」

「ツ

顔を赤くする遠坂を他所に安堵の息を吐く士郎。

2人の様子には流石の俺も目が据わる。突然見せつけられたラブコメに砂を吐きたくなる思いだ。

士郎には魔術師がどんなものかをしつこく説明した筈なんだが。いまだに士郎の魔術師にたいする認識は甘い。この分だといぐら遠坂が魔術師だといつても士郎は敵対する事など考慮にいれていないに

違いない。

「ていうかこんな戦いになつたらそんな問題じゃないわよ。相手はアーチャーの矢さえ無効化する怪物だもの。私たちの援護なんて始めっから通用しないのよ」

「……アーチャーの、矢……」

その時、土郎の無意識のつぶやきと共に遠くから膨れ上がる魔力、濃密な殺氣を感じした。

アーチャーがバーサーカーをセイバー共々殺すためにか宝具を解放する。これは俺の単なる推測でしかないが、土郎が彼女を庇いに来る事を確信しているが故の行為かもしれない。

カレもエミヤシロウだ。何の躊躇いもなく彼女を殺せるなどとは思わないし、衛宮士郎（自分自身）の行動パターンを知りぬくしていふ筈なのだから。

「セイ

「こらこら、待たんか

「つづわあーー？」

アーチャーの思惑に気づいた土郎が駆け出す前に襟首を掴まれ、遠坂のいる方に引っ張り戻す。

士郎を押し退け、俺が彼女の下に走る。

「俺が行く。おまえは遠坂の傍にいろ

「なッ、夕兄！？」

念話で知らせる手段もあつたが、そんな事をしていたら間に合わなくなる。幸い彼女の斬撃があたつたのか狂戦士が丁度バランスを崩した。

その隙に強化した体と元々脅威的だった身体能力で驚く彼女を抱きかかえ飛び退く。

次の瞬間、背後で大気を揺るがす程の大爆発がおこった。あたりいつたい炎につつまる。

「…………！」

「……バーサーカー……ランクAに該当する宝具を受けて尚無傷な

んて」

それでも尚堪えた様子のないバーサーカーに史実を知る俺までも実際に目にした衝撃からか唖然する。

正に最強たる力を示している彼の大英雄。その従者の主たるイリヤが余裕なのも頷ける。

その底知れぬ自信の意味を俺たちは今漸く理解したのだ。
それもランクB以上の攻撃じゃなければ、効果がない上におなじ攻撃が効かない規格外。

「こりゃあ、いくらなんでもバケモノにも程があるだろ。1回ぐら
いは死んだんじゃねえか？」

「助けていただいた事には感謝しますが。そろそろ下ろしてもらえ
ませんか、ユウシ。……ユウシ？」

思わず冷や汗をかいってつぶやいた俺をセイバーが訝しげに見上げる。
今の攻撃はランクAに該当する威力だった筈。

少なくとも無傷なのはおかしい。これは再生したとかんがえた方がいいようだ。

「おいイリヤ。ソイツの真名は『ラクレス』だろ。宝具は12の試練。
…………」

「いまのも自己蘇生したんじゃねえのか？」

「へえ。よく分かったね、お兄ちゃん。そうよ。其処にいるのはへ

ラクレスっていう魔物。アナタたち程度が使役出来る英雄とは格が違う。最凶の怪物なんだから」

真名がバレても全く臆する気配のないイリヤ。

むしろ戦いを愉しんでいる節すらある。それは幼い子供が蟻の行列を無邪気な好奇心で踏み潰す残酷さにも似ていた。

「それにしても見なおしたわ、リン。やるじゃない、アナタのアーチャー。いいわ。戾りなさい、バーサーカー。つまらない事は早めにすまそうと思つたけど。少し予定が変わったわ」

「なによ。ここまでやつて逃げる気？」

「ええ。気が変わつたの。アナタのアーチャーには興味が沸いたわ。だから暫く生かしておいてあげる」

「おう、帰れ帰れ。んなバケモノと好き好んで戦いつづけたいつう馬鹿なんざいねえからよ」

俺のこの発言は軽い厭味だつたんだが、イリヤがほんのわずかに寂しげな顔をした気がする。

だがそんな表情も見間違いだつたのか、イリヤはいつも不適な笑みを浮かべ、まるで幻影だつたかのように炎の向こうへ去つていつた。

「それじゃあ、バイバイ。今日は中々愉しめたわ。また遊ぼうね、お兄ちゃん」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1407n/>

運命邂逅

2011年11月13日22時06分発行